墨僊畫譜大人卷

源氏百人一首 完

江戸畫林　千鍾房
　　圭山堂合刻
　　玉山堂

人をはつせの山
まかねはつせの山
そのかみ人もなれど。
海ならねども
みるめおくとも
しらで人をも
かうもあるべき。
人をばいかで

源氏物語一人一首序

紫式部

かしこきをことのかいは清らかなり
京都なる人の家にて

天保十一年十月

藤原満述

源氏百人一首

○総論　黒澤翁満述

○物語といふ物は唐土の小説今の世の草双紙なとのたくひなれハ本より跡形もなき事又ハさゝやかなる事を枝葉を添て拵出して世に翫しくなべてのわかき人の目をよろこばしめんとてかけるものなれば言葉も詞思ひ設て作りなせる物なれバいへど其作りざまも又種々にて或は長き事をつゞけて趣く書るもあり又ハ短き事を引延て物語の丈を出せるもあり此世ども大方ハ世に有なく哀しき事を世にありしが如く書出なして男女のならひ物の義理合なく人情のありさまを作せる物なる事今の学者達の其文の雅なると俗なると趣向の

古風なると今風なるとの差別をしらでたゞ同じにおもひき
なるゆゑ彼と是とを見合せて悟るべしさるを今世の歌学
者流は是をわきまへずして云なして常にありて此詞のみ
輩なれバ此物語の本意にもおもむかでひとへに古
しき非之唯清濁に気を見る為の物として古
代の学びようになんありけるされバ当我もしるしていへる
も作り出しゝ物なれども其中に其名ばかり残りて今の世に
伝はれるハ其趣向も如何なるか知難けれども大方今の世
に残り上なれるハ竹取うつぼ世つぎいせ狭衣取替ばやの
類程彼是見皆其おもむきの成之本末志けなき
やうなる物多有るを独此源氏物語なん群を抜て出

て実録めくハ其人に覚束なくして三四代の間の事を公私に
渡りて細に作り成せる筆力凡人の及所にあらず且人情機
らくらかちて其文の妙なる事譬るに物なし世に唐土
の小説の中にハ水滸伝をもて第一の上作として其出来余り
に妙文なる故に是を出藻しける作者ハ子孫三代が間唖
に生れしといふ浮説なども有るハ其文の妙なるを嫉みて
ほめたる物なれども今此源氏物語にくらぶべくハ見ざるかの
水滸伝なぞの文ハいたく拙くて日を同じうして論ずべき
物にあらず其中にも伝中人物ハおのおのおもむき婚姻一貫せざ
る物多く婚陰のなし人の後にするわくなり婚才なし人の
後に不才の如くなる類すくなからで数へ難し増て人々の気質の

細かる所々不審て人に様々に別人のめく
見ゆるまで覚きを此源氏なるおきてハ物語中数百人乃
奉賀を一人〳〵まいと細やかの書分て始より終と七ツ
四ツ乃部も乱ぜ雑ハ強の奉賀程ハ本性とおぼく一
愛まる奉一愛る奉一しきを妙なる物し世よりてそを
る水滸伝ぐらゐ程かくおぬるおぬ増て女金ハ海をるゝみ
見ぎさんぶ和漢の小説物語の中ゟハ此源氏ぞうく
迚くるハおく群を離て猶そのみ言くぬ学くぬか先得
くまか物ゟる事を知べし〳〵然るを芳ゟわ注釈ごとを
益ゟき儒書る俳ゟ有て出ぢしくる出をゟさて
も学事を学先のくまゟる所ゟ眼を注けて味ひ

見るくゟきハいのゟおゟや

○此物語の机者紫式部ハ越前守藤原為時の娘よそく右衛門佐
宣孝の室となり大弐三位を産〳〵北方倫ゟ仕〳〵て共後一条院の后上東門院ハ則道長公乃
娘ゟるをりて又上東門院の女房となり此物語ハ共程手
机当る物しまして藤原氏ハ娘ちれバ藤式部といふべき故紫
式部とも云る名義ハ清輔朝臣抔の云る如く此物語ハ中ゟ宮
名ゟ一ゟハ一条院清涼毎の上東門院ゟ奉〳〵もるゟ
て我ゆゝしき社者ごとのみ先せとやさ〳〵先のみの為此
名ゟり式職の義ゟ云ことゟ付て等より況ごとれぼも

則紫式部の出る日記の中より此段りなるやうに
らふと伺ひまふ源氏を修るべき人も多くの
物しるひと学者うち云ふとこれ
式部をさして云ふと云ふ
る紫上ハ女の最上の物也ハバ藤ハ本より紫
紫式部男子ハバ光源氏やまざぬといふべき証拠ハ無
女ども物語ともハいはびともも一名をもいひてかくぐ
をおべ女作者也ハバ藤ハ本より紫巻ともいひてかくぐ
よせたるをもて名ふの作者よ
ととびのつゞる物と見人方ぬやうなるを修ふ始よ
司ともよび名ハ紫ふ文字を付めづ結文ハ物任中社ぬぐ

也てゐる女を学ふとしても名付人事ハのづのこそまづさふゆ
ふく考へ渡しく悟まべし
○此物語の注釈ハ昔よりいかりの
湖月抄ハ女学をつみてあくまで
ふハ湖月ハて大方ハ旦女浪ハて旦女浪ハてゝも源注拾遺源氏新釈玉
小櫛ぬど枝葉ハ枝葉をハてゐる物をゝて悪ふ成ぬる
ゐるを枝湖月抄ハ本文ゝ見ふ修よ見ふて
てゆくく学ふ旦ハくのみ成ぬるへども枝
いふおゝや完ゆるものしくも妙ハ旦ハの解ぬどハ後を
解ふ面ゐるて心ゐるハふんぬ今ハ趣てゐるハかりハ度面
首余り社ぬのくへ旨ゐる人ハ解方古注ハ要ふる

物多しかん合せて味ふべし
○世に紫式部は余りに妙文を出せる罪によりて地獄に落られたりと云ふ浮説あるは法師の筆法のわざくれにて論ずるにもたらぬ事なれども浅く思ふに此物語を書る中に罪となるべき事無ければ古抄どもに取分く物語の本意をあげて強て儒に引付仏に引付などして是非を弁へたるは多くてかかる一大事をさし置て論じたる物無はあやしかりける事之は未だ明らかに弁ふるを見るべし先づ朱雀院冷泉院など歴代の天皇の尊号をさへ其まゝに書出せる事は如何にもあるまじき大罪ならずや本より唯其尊号を借りたる而已にて其事がら殊に冷泉院は母后源氏と密通にて乱れたるより出る事なれば

益てもなかるまじき事なるを思ふべし発端の語は何の道の御時にかありけん云々と書出されし始終此心にてかくべき事なれるをや是によりて思ふに上に云る堕獄の浮説は恐らくは世の批判などもありしを其序端を聞伝へて法師の筆のおのれが意に引つけたる筋ならひ出せるものならん其引付ごとこそ以の外悪みたる罪なくしも云るは甚しく実の所はかへつて見ゆ然るに我皇國は神代より今の人皇に至るまでかたじけなくも皇統絶させ給はず天地とともに天つ日嗣知しめすたぐひなく太古の天皇より今上皇帝と申しまつる尊び崇み奉らでは叶はざる理なるを中頃より此心を忘れて道をしらぬ書どもおほくありて罪を犯せる物おほかれど増て今の世なる

物ゆゑよいおのづから
書くさび酔ひ悩るやうなる
しき非の仰せられを見べし　祖国は国王勢も陵ぐるやうに
たらちねば皇国の武将などの如く移り替るべき唐は世と来ては深
は世は他人なればこそ又明の世と成ては唐の世は他人
思ひ悩るる及ぶべく代る等かく
熱てさるるやうなるを出るを
を忘れるやうに非也則係民物語も此辞をもつて
行くはざるを知るべし越るを
冷泉院ぬぐはりやせる
まそたびぬぐもいてるはめて

則転に溢れる物や

○今此書を作る放ハ世は小倉百人一首の誉く都は行ハ
住て年に重ねる変女をもぐ古の昔ぬ程より恋しく
口ひびて忘るるやうに
ゆく猛をく加て世は弘く
詠ぬる放ハ叶てる放ハ越ハ西ぬ
出てまのねるしりそびかるるやうに物をき捜ぢ
考る男女とそは弘のへば百人一首と誰知ぬ老ぬ山の
奥面白そを古行渡る世後ハ学ひて何の弘ぐる
たらねの弘ぐるとそ捜ぢ
古今集ぬぐを始て則係も係弘ぐるとて世ぬなれハ

五十四帖の巻名の歌どもをかゝることになせる物也されども是は唯僅の歌をあぐるのみにて物語中の人名をも知しむるにもあらねば増て其おもむきの序端をも何ぞ知べき物にはあらず且此歌のかゝりども今は世に弘く上下おしなべてもてあそび物にはあらざる物なれば知る人もまれ也然も行はれざるのみか其本を考るに是其始に絵を加へたる一巻の世に行はるゝ物なればおそらくの為て目利ざればたまたまかゝることに向ひても取事なく止ぬゆくはざれば僅て楽しのしざる故に自行はれ難き也かゝる今は源氏物語中なる人々の歌どもを一人に一首づゝ出して傍に其詠人の小伝を書し歌の注解をもなし書くに絵を加へてひとさゆらかの小倉百人一首に習て物しかけて様に書て世に弘く随し

て幸に行はれなばおさな人にはかのうたのことをしる物なく歌をもよく味ひて行て読にはおしなべてのもてあそび物ともなりなば自此物語の序端を世の童子に口ならし目なれしめなば一のちなしぐさとも成ぬべしと維彼のおもくのがしたまひつに此度聊のいとまあるにまかせて筆を起して僅の首を選び撰つ

○此物語に出る人々其数凡そ三百卅人余りありて中に名有るもあまたあるをなき人々また六条の御息所は大臣の娘にて前坊の御息所ともいふ此大臣も前坊は唯此息所の身の上を知せん為にのみ出せるのみにていまだ其発端に見ゆるる有も熟て此人を出せる事此歌いと多し又人の子の生るもしかへて其子のなきことにては其物も多し其外

いと少なる名のみ出せる人々なれど彼是合せて十首にも過
ぐさゞれば此歌は勿論にて其余物語中にて名ばかり見えたる人〻は
ども自然に歌一首も詠ざる人はなくて是等が歌をのぞき
其外も歌主たる人々につきて歌一首づゝを撰び出せる其数百
廿三人の歌にぞなりける
○上にも云る如く其名ありて歌ある人も有ぞ又歌ありて名なき
人もありたとへば秋好中宮が女房くちおしき歌よみて歌三四首も
並べ出し或は殿上人と有も有て誰とも定まる数に歌も
ます彼是にあるを今は其歌の詞を取て其人の名として又は其
作者のあるに名付などもして假初の名を其時の出ぎまり是作
者の心みにはすれば此のぶる事もあるべうなれ必ずきうでんは知志すしと

作るより也且は猫怯の女蘇生の女などの歌も本より作者
が知ぬ名なれども是等は物語の始の方に出たる人々なれど
初のつのら目別に別る人の歌き故に唯いつとなく然れ共
名ある名あるを見るべしされば今役せる則此歌ありなでふ
事このまんにてなん
○惣て此書に官位ある人は其極官を出せり是大方此書也
然れども今は此例にかゝはらずして六条院と書べきを光源氏
柏木権大納言と書べきを柏木右衛門督と書る類多し
是等は聊かにても廣く世人の耳にふれたる方を出して童子
におぼえ安からしめんとてなり且歌は猶に従ひて拾ひ出すれば
此物語の始より順に人々の小傳と歌の解とを見合せて源氏

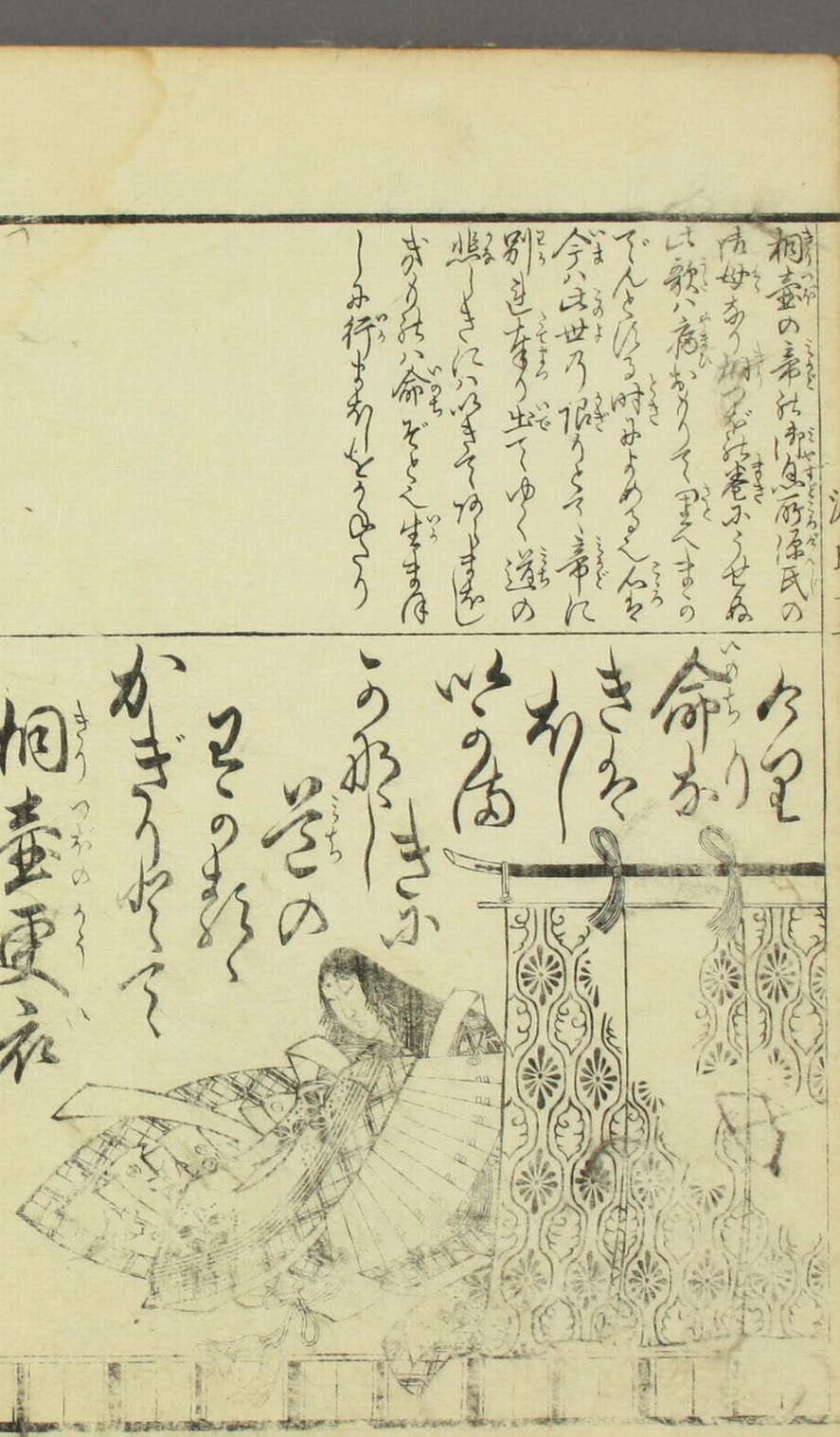
一部は大旨の述るも思ひそゞろ
しつゝもそゝろ

○終へ畫るまで見制安このうしも
おぼえ来ぬ唯強ひなる任もて
人のそゝ甘そ聊まとりおく
しも言るまゝ廿賣八百廿人の歌なるを
やうゝ見れども是ハ唯おほるまゝ
のめき物おとりつゝもを嘆ま知安このう
なやうと思ひ人のそゝ是そゝ

源氏は実の時父帝より
賚の巻ゝ朱雀院の法住を
ゆづりのひ林の巻ゝ爾来
ふ廿歌ハ源氏の元服の折
うらの生の大臣ふよみてのへ
るまゝ源氏を大臣の娘賚
の上廿聲ゝ以びきこうけしき
まへるまゝ仙の趣てえ彼の時
数を尽ふ廿程る系そゆふ
廿をそうゝゆひうの巻ゝ
をきゝおくゝおひさ紀なるまゝ
のちきうちゝりを今るうえ
ゆひふもびこえさうんを
なりやと大臣のゝをうけさせ
まへるこいを紀るきゝふりけま
きに同じ雅きるも

相撲垂帝

相壺の帯は御所染氏の
古女あり相ぞ老ふるせぬ
は歌八病おりそまへまの
でんとする時みよめるくみを
今八は世乃儘うとそ帯に
別迄幸う生てゆく道の
悲しきにいきそのまゝ
おくれ八命ぞとそ生まの
しみ行まゝとうそう

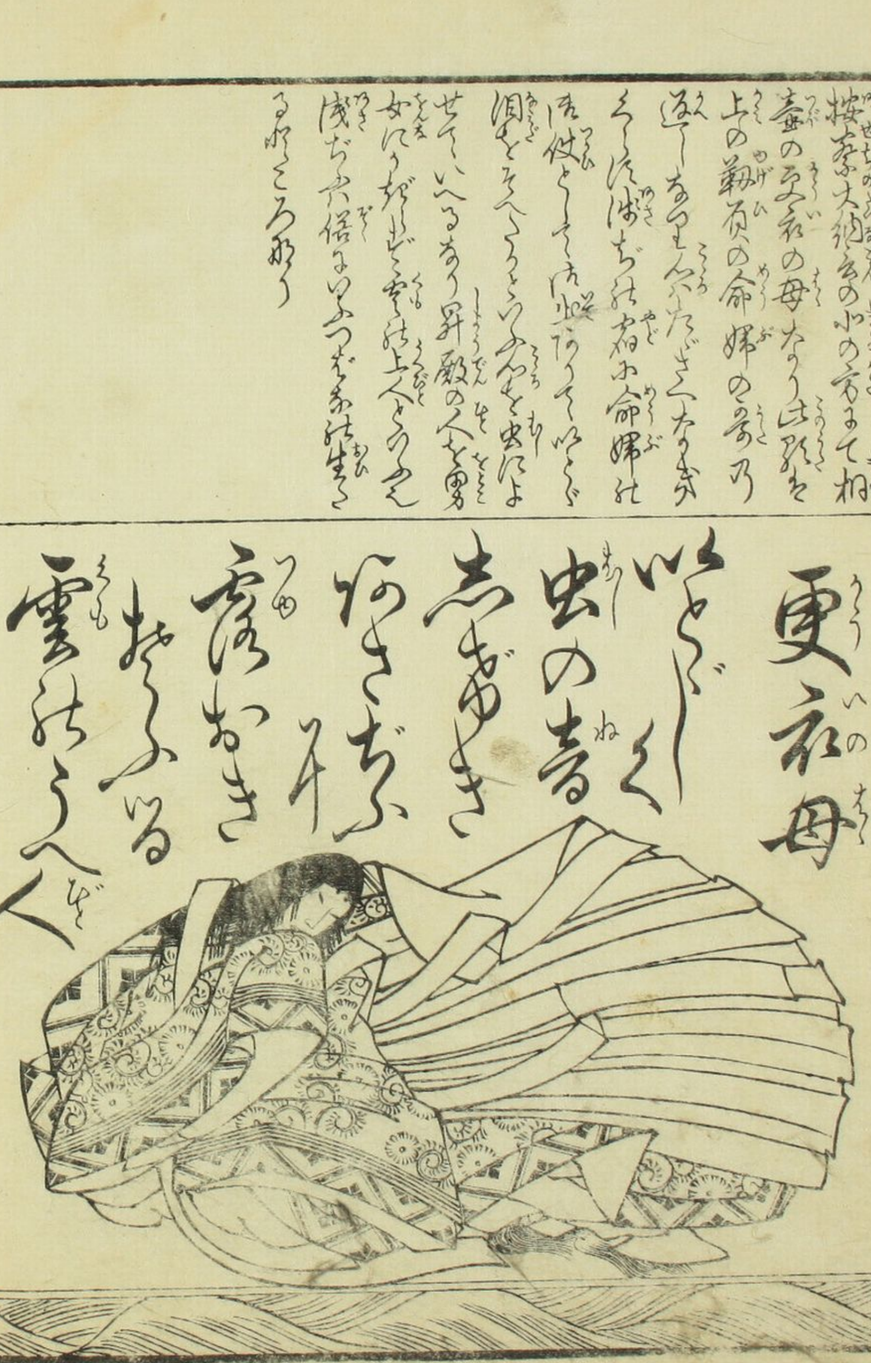


今更
命か
きそ
わ
此の
そのまゝ
かぎり
相壺更衣

糠雪の女房なう出ぞ
相壺乃更衣せそ後その
里へ帰れ仕行てなん
とする時み座の出乃音を
聞てよめるくみ出ぞく
雪ふれ降りてを
雁なきたるそ
泪のこぼるゝその赤と
出る事とそんくめる
あみだ八経もの

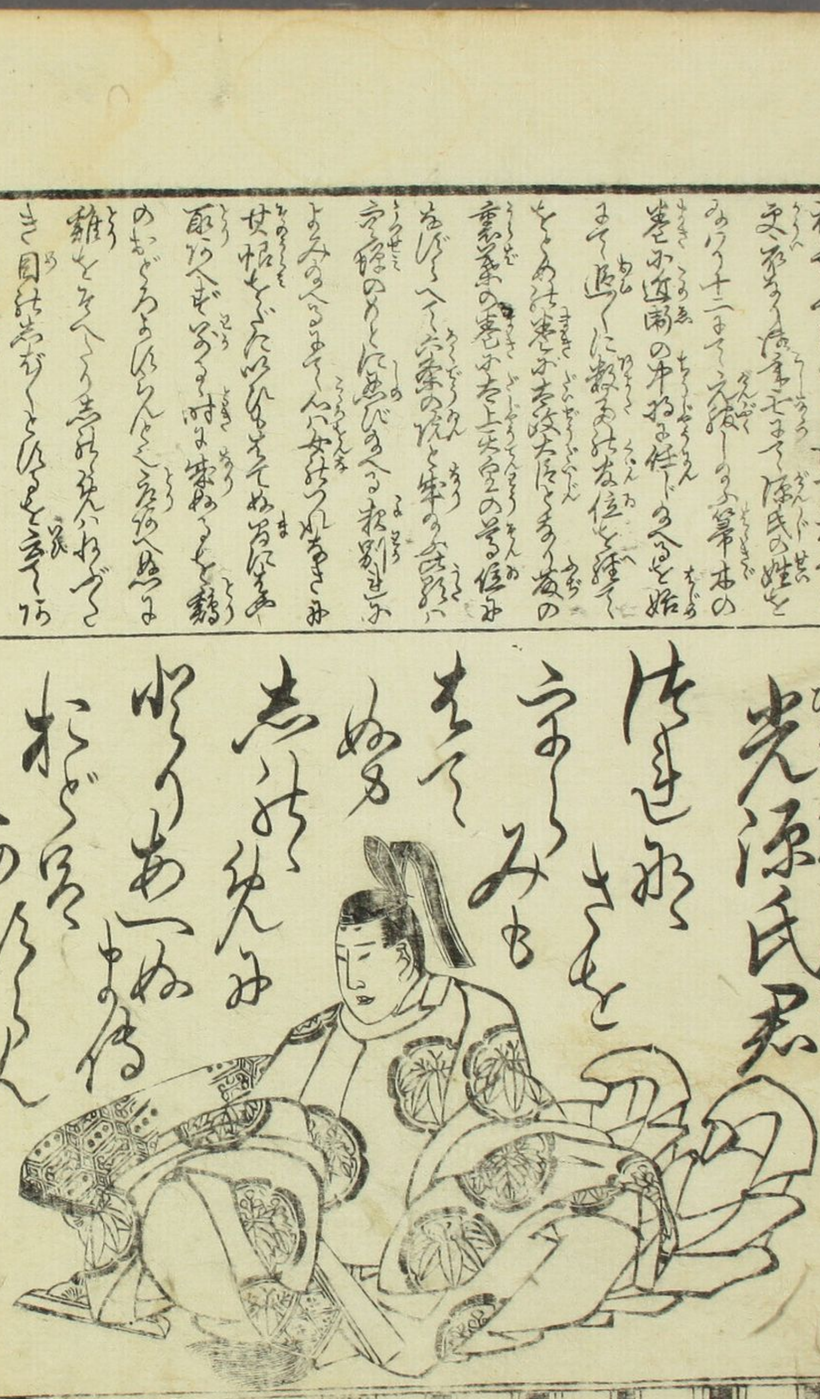
按察大納言の小の方の母
桐壺の更衣の母なり此ひと
上の親族の命婦の許へ
遣すとて書たまへる文
そらにはかなき命婦ぬし
は仮とてそれにかゝりてゆく
間をそへくるゝ虫の音
せていとあはれ深き夕
なれば女郎花の一もと
折てもて上へるの
歌ばかり所柄なりと
るかころめり

更衣母



さるべき大納言の源氏のかゝ
せ一人を加冠とはさもあるを
宮達といふ中也葵の上は父左大臣
の法曹なるつゝしみ給ふ
ほどの事八条氏加冠は時
相応帝〇いときおさなき初え
ゆひふさわしからぬをえのほに
ようかけさせるくるほどの
程のさま我志の
ほさまほうにて源氏のほんざ
替ばえもき世にりこえ
おもおもしく見ゆるそ
あの年ほの娘子を
いへるどにしあをばいかゞせむ
同じ

右大臣入右大臣



光源氏君

左馬頭

左こるの次の指をくひつきたる女まゐり別上の段詞通りくちおほひ笑ひこゑのさまくきこうをわらひをしへ数へつゝまゐり踏出やう別るべき折ちんとこゝやをれ笑やうう君ごまを別るゝ君の浅ふ別るゝ君の浅ふ別るゝこゝろ悪て浅ふる物をまと吟ずる体よりの出立やうやう指ほどもおさゑこゝろ

指吟女

左こるの次の同車しそ月秋か女をゆびくちうほゝを女の要もおきたるにぐのこう笛を吹合せよるこんや要も面白く月もさやかにてもにたがひに次ぐまもおもかげ君ゆへのつれなき思ひをうらんでふべきうえ次ぐまもおもかげ君ゆへのつれなき思ひをうらんでふべきうえ折ふし恋ゆき我ものんがてもそ侭よりたゞそれぬとうみな仰うらもまの要の出立

琴吟女

要の出立
月
えもいわれぬ
うらみ
指ほどもおさゑこゝろ
なきを人を
うらみ
侭よりたゞそれぬとうみな
仰うらもまの要の出立

琴ひきたる女にて殿上の殿
上人への返し也上の歌ハ女より
待人もなけれバよみかけゝ
るを詳しく返し也其殿上人を待
迄もなきものに云なせるなり
心ハよそに吹風を今宵合せの笛
笛なれバ我にひきとむべき言葉
もなしと也今十月なれバ木
枯といひ言葉をそへり

木枯女

こがらしに
吹あはす
める
笛のねを
ひき
とゞむべき
ことのはぞなき

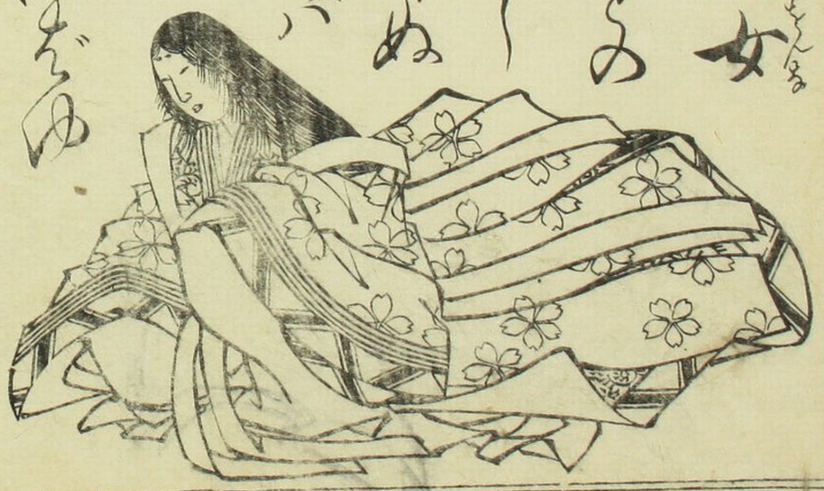
藤式部丞ハ源氏雨夜物語にくはしく出たり
品定の席に加はりし人也
此歌ハある儒者の娘にちぎり
て折ふし行けるに風病にて蒜を
喰られバ今夜ハ口くさしと云より
ひぐしてさきたまへと云けるを
源語にて述べるが女に似合ず
うるさけれバ逃帰るとてよめ
る也心ハ蜘蛛のふるまひにても
今宵来べきものとハしれたるに
其の心ざしを知ながら蒜の
香のうせるまで昼ハ過せとの事
やさしからぬ事也○我せこが
来べきよひなりさゝがにの歌を
り蒜を理由にせよといふハ
倍まさりけるきとのふかく

藤式部丞

さゝがにの
ふるまひ
しるき
夕ぐれに
ひるま
すぐせと
いふがあやなさ

絲喰女

儒者の娘そもかうち上り
ろくろくと仏を念じ奉へぐそ
不まじき添ゐぐる中なりしが
屋ゐるまゝ見そやぼくそ何
の恥うきそのたもたる
くまんばかりくにやぼぐく
しまぞゆい恥うもこと

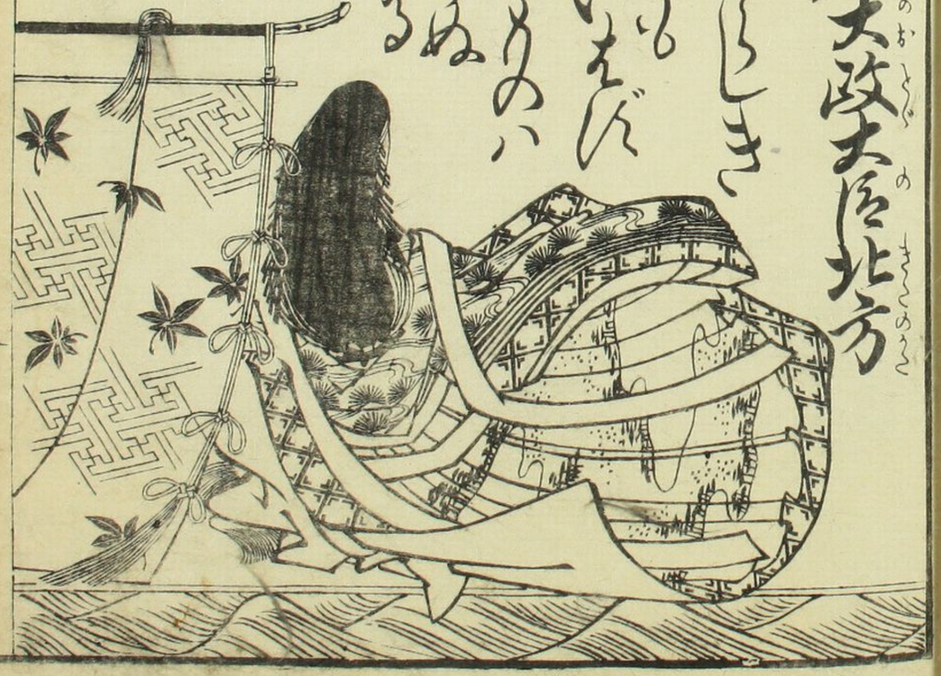


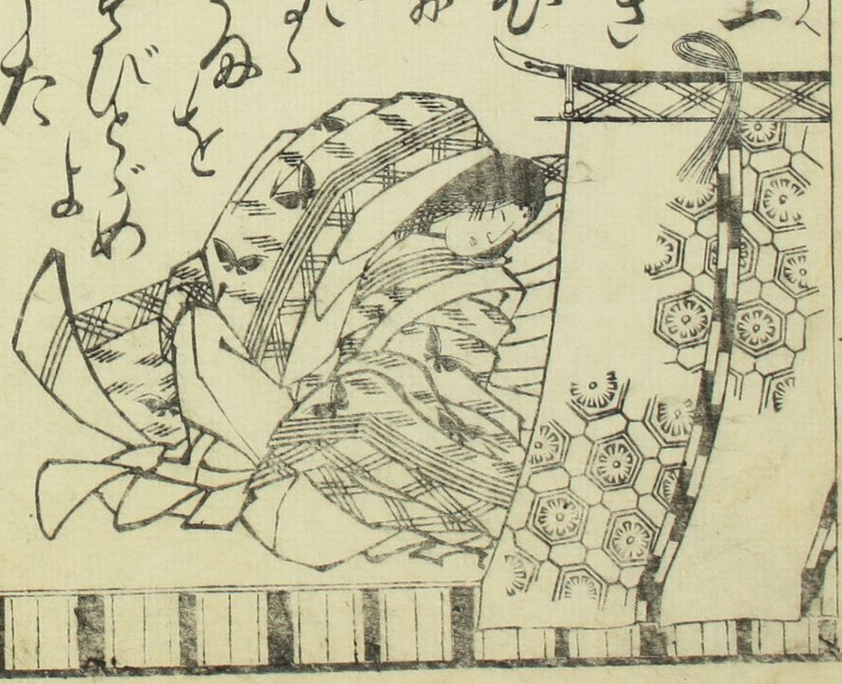
父ぐ父のおや母相壺の事はほゞ
姫君人の招ぎて第出仕をぶ弟招
とゐをえるよう次ぐ友位を経て蔵
人兼検非違使佐に大政大臣の業
巻ぶ政位の表をまうて帰りさ
まふさのぶ姫君を井戸とぐ勧
との中をさけ空のひゞを今ゆる
さまむおぼして巻の方おぶのせ
夕ぎりを招ぐる巻ぐゐ今我庵
法巻の空ある花を蛙手巻
夾法名紙を巻まのぐぬぐふ
事はつるべきこの君来なの本
ぐ下ぜんぶ女方ぶ花ぢるを
本のゆのうをこひなぐうみあう
たそうれ小雀を彼おうまぐくて
見えやのれぬよぐ

致仕大政大臣

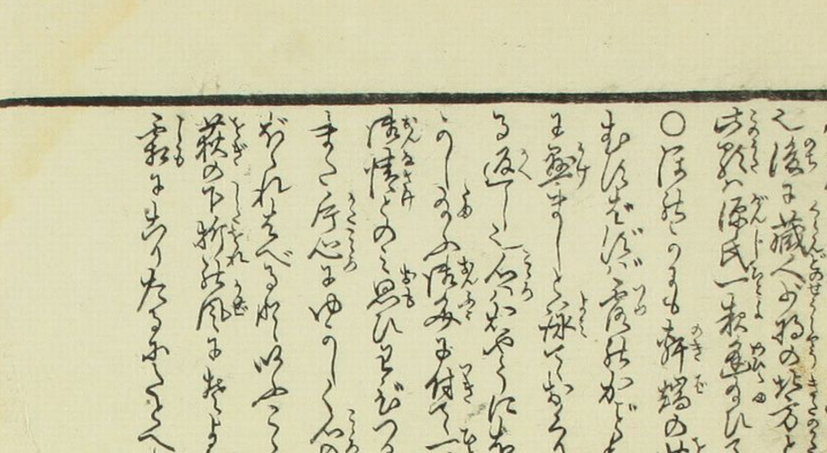
我宿の
藤のふぢ
さまざ
たそ
のぐ
ぎづひや
ぬ妻の
こうあ
おぢぐ我

父大臣母北の方相壺の帝の時
更衣といひし時母北の方相壺
更衣のおもぐ〳〵しき程にて
まゐり給ひしを初めは
桐壺の更衣の御方にて
殿を生み給ひし後六条院
東の御方の
更衣を北の方の御事
くらゐみなをとり給ひ
めのへの時は
源氏の
御息所のおもてなしの
るゝ石ゐ物のひはん
る魂を君の
むをびでぜんそくの
魂はらひ
をもとべばぐまるゝ
ふやうにて
祝はせ
相壺の帝の
源氏の
せのひて
苔衣
太宮と
の上
源氏
今を
ぶ
る
も





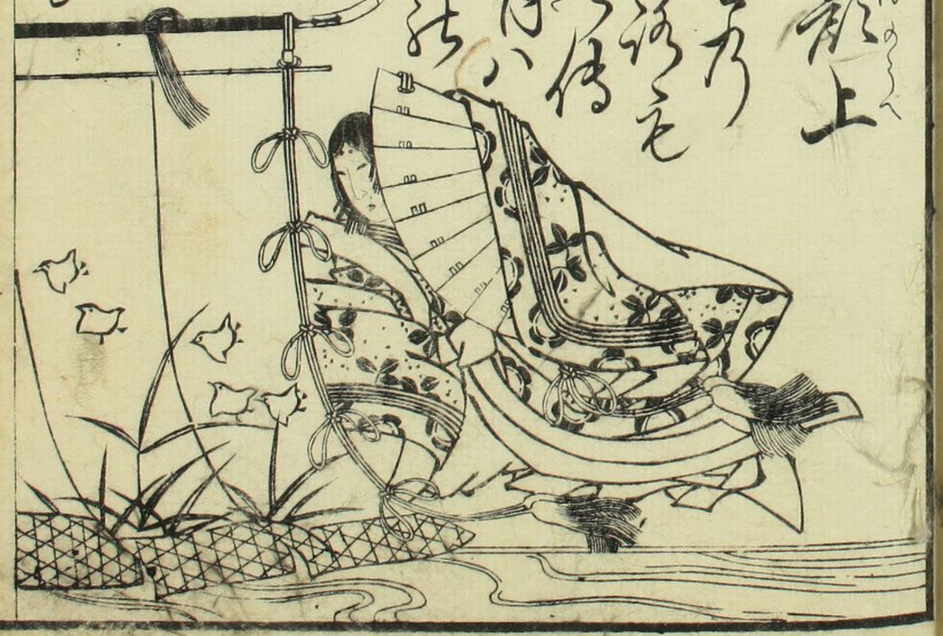
伊勢の海のあまの娘をよみ出しの
心ばえ藏人の君の姿とみる
ぞかし源氏一歌をよみて後
○ほどもうつろふ軒端の萩を
まねびぜんに書ながしを何
ま事もすゝと歌ひおろしたる
ほどゝいとおやうにやの内
うつゝうつゝみも有て一歌は
感情とのこゝろひとつなる意也
まこと所心をゆるしくのむす
びれをべる所以ふところ娘
萩の下折ふるやうなぞまへ
書ながしたるまことにうつ



軒端萩

ほのぐと
この
風は
てる
下萩
萩乃
雫
もそぼつ

之伝中将の娘と教仕のおりに
逢て玉箒を生る後は源氏の
おのぐ夕顔の巻をよみ
は帚木源氏同車して何の
隈ぐともなくやうのものゝ我
まぐさらぬ志のさまとよみ
あへる歌ゝその山荘をかまへ
給ふ山の端とその山荘のさまを
ともにく行月ハ中ぞらの
軒のきえもの斗りと
ゝ源氏を山の端よたとへ我身を
月もたとへてかのぐく夜ふ
れ出る形まで覚来るくれ
りやう



夕顔上

ゆふがほの
山のは
こそ
しるけれ
ゆくかたも
なくて
おもらす
軒や
たえ
ぬらむ

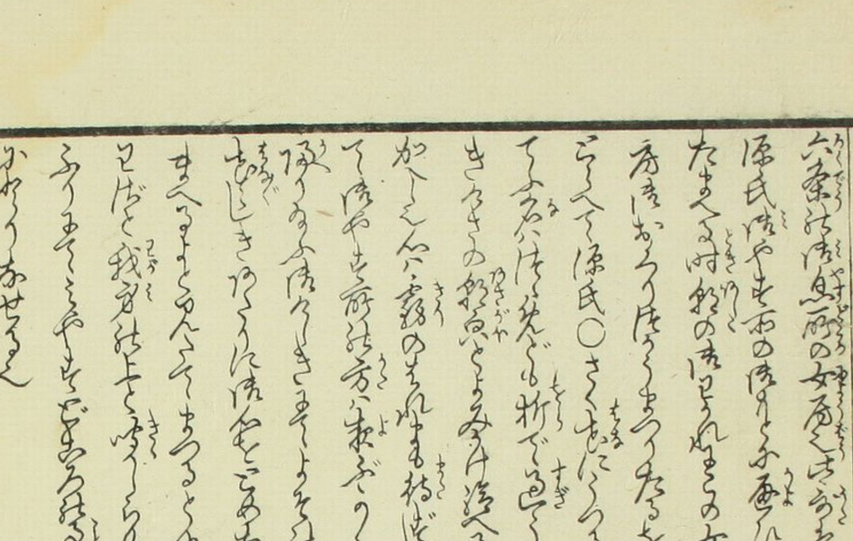
夕すゝみの上ゆ五條のおほ佐る
女房こゝ源氏ほたるに仕て
夕すゝみのそひを折をすゝむ時み
扇ゟ出きる哥こゝハ
いまこゝつの内ゆふすゝみを折きて
もけ面目を施すへるハ推
ゐて光源氏の君とこそ推
しまう定れとこゝゟそも
推事面目を施せるへひ
ゆきそこ

夕すゝみ新宿女房

六条御息所

大原の新坊の尼御前
我好中宮のまゐ母こゝ林の巻ゟ高
童に異して伊勢へ下るまて
こゝハ巻ゟほゝつゐ色てかゝれ
ゆふ源氏ゟ高ひ人の一人まて物の
けこゝ悪しこゝハ源氏ゟ
おとゝれ娘そゝほゝみのこゝろし
ほてごとこゝハ物おりひゟ袖ぬ
らせべき哀そとゝ姫ようまて
和なごうてゆびきそあるゝ我
ゟこそこゝみ思ゟこゝハやうき
みほこそぐゝ社ほきゝ社ゟ
ゆそそこゝ哀ゟ社ゟ尼をゝこゝ
り尼の中にゟゝ袖ぬらし
ゟゝき四ゟこゝ我ゟみこゝ
しめり

六条院の女房の名を
源氏はやまの御ふみ
たまへる時折のきはよりもの女
房きおろしまうけたるを
ごらんじて源氏○さくもにごる
てふかはをくぐる折でるも
きくきの数高きよりみ出る
かくしん〳〵霧のそれもわび
てほや山ふかき方に袖ぞ
ぬれける



中将君

北山の僧都の妹君宰相の尼
のかゝへおきて給ふ上の母方の祖母と
この尼君上の幼くて母も
くれなゐつるを我ま一つは書ひて
うちおきて又病重りくるしき時も孫
うしなひたるかん行末の
覚束なきをうち
おもひて我なきあと
死んのみおもひ
やるものをなどかくは
て云々おもひ
て云々

北山尼

きくからに
いのちも
あやふき
わかの浦の
あまの
たく
もしほの
もえて
思ひの
ほかに
かなしき
かな
少納言乳母

小山僧都

淨氏の瘧病をかおこたる
聖人くし上と同じ時ふ淨氏の
淨血をたまりてそうある事
こん山淨きよ一室のみふ坐さ
る事ありき聖人乃たまく
老人の法のふ出ていまごえ志
らぬ清秀雅をこまたてまる
とのおんをもひよせて必ると
若の新八擬集ふもつまことを
ふくろ

何某寺聖人
奥山の
松の
おくを
まぎらわし
あけて
まぎれぬ巻の
かほを
ふるまい

武部ふの子ふ淨姫母ふ接ふ
大納言ふおもめく雅ふて母
おんそうし祖母の尼ふや一ふ
てかふにおくりを淨氏ふ近く
らんてく淨法の巻ふかくれふ
六条院ふ数ふもふ賜へる淨
氏の品ひ人の才てく事の上ふの
此歌ふ宵えふ餅鏡を祝ひそ
淨氏〇ふ永ふけふる池のか
みふ毋ふうりふ影ふ新ふ
べるとふみのへるふしふ庭
の池水ふ鏡のふくふるを方代
うみく君を信べき新のふくしの
おくえふるふ池水を餅鏡み
ふえて住ふ淨をうふう

紫上

そめうつす
池の
万代を
信べき
新ぞ
ふくえ
ある

京極中川に住る人く方違をさ
式女に源氏でふび寄る所ありて
後ほど経て其家は前を通り
の時に㊂を奏へけるぞ思
ひわぬ方もずかしほのかくらひ
宿のかき根やとみて好ひ
道させたまへる限りをかろ
ものおもひ出たまふ人その君と
推しられども不審やた
えまつらはさしてもおもねば今
更思ひより流らの空を先とほと
とぎすの声は五月雨に紛
ひてきこえかぬるにたとへり

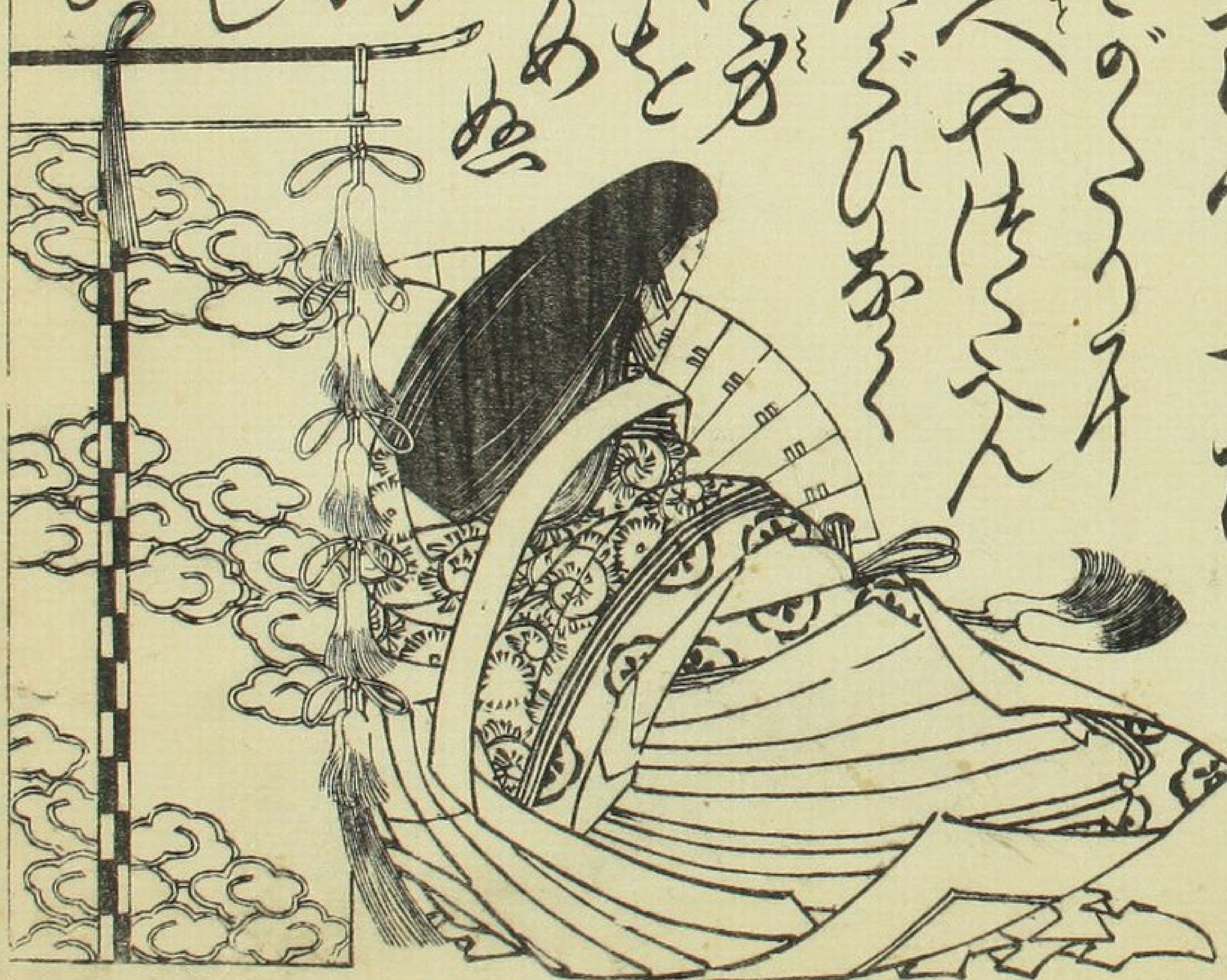
中川女

ほとゝぎす
ことゝふ
聲は
それなれど
あなおぼつかな
五月雨の
そら

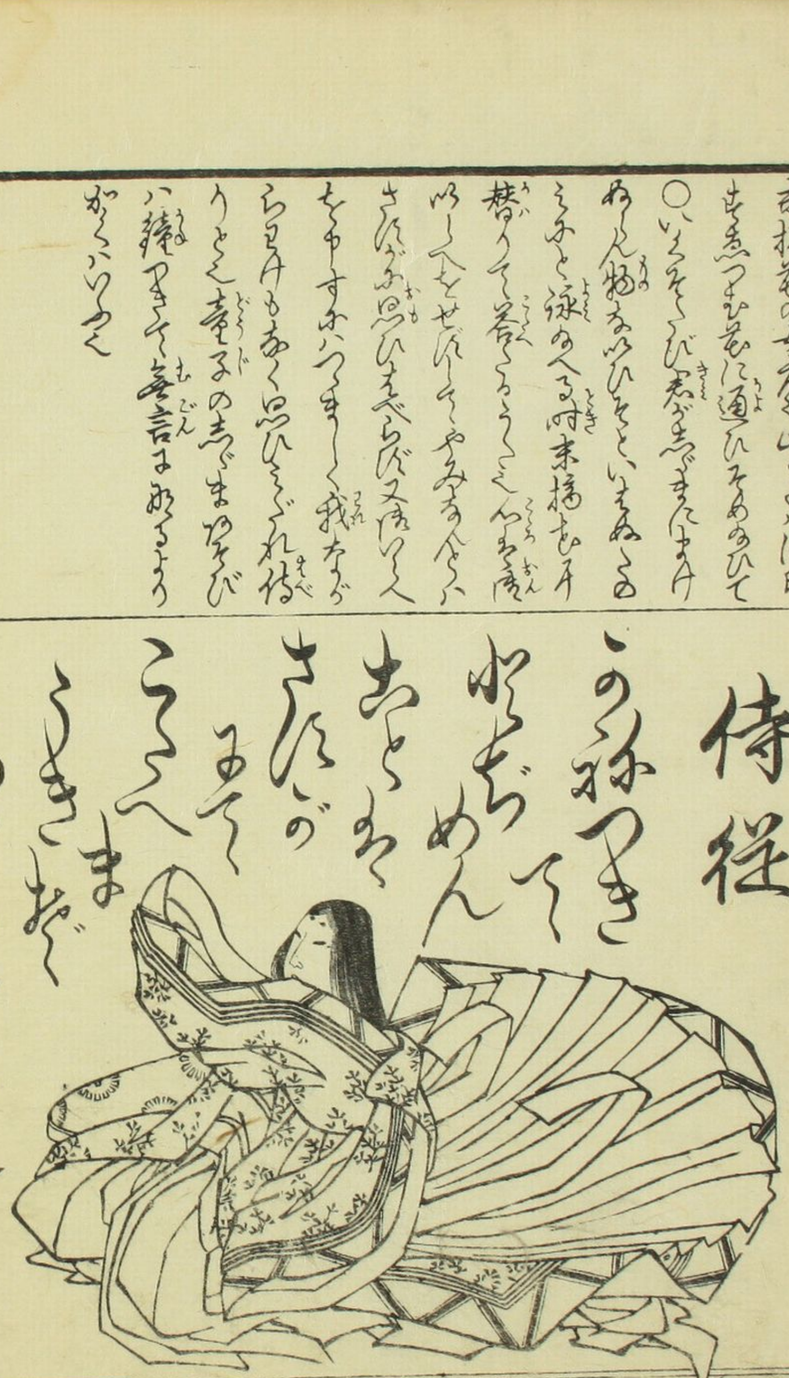
先帝の后ばらは四の宮之相壺
の宮に相壺の帝の女御となり
紅葉の賀は其宮に冷泉院を生
たまひ榊の巻に落飾ありして
薄雲は其宮にかくれ給ふ出家は
源氏○入ても来し寳暁まれ
ある夢の内にやゝて使ぎる
我身ともがなとよみて詠る
渡りてく給ひ源氏とそその事
ありしを深くおもひて悔給へる
よしにて世にたぐひなくうき
やうき世は我身は上をたゝ夢
のおくくなしそこても都世ぞく
りたかなしきとなやおもんと
なり

薄雲女院

世がたりに
人やつたへん
たぐひなく
うき身を
さめぬ
夢に
なし
ても

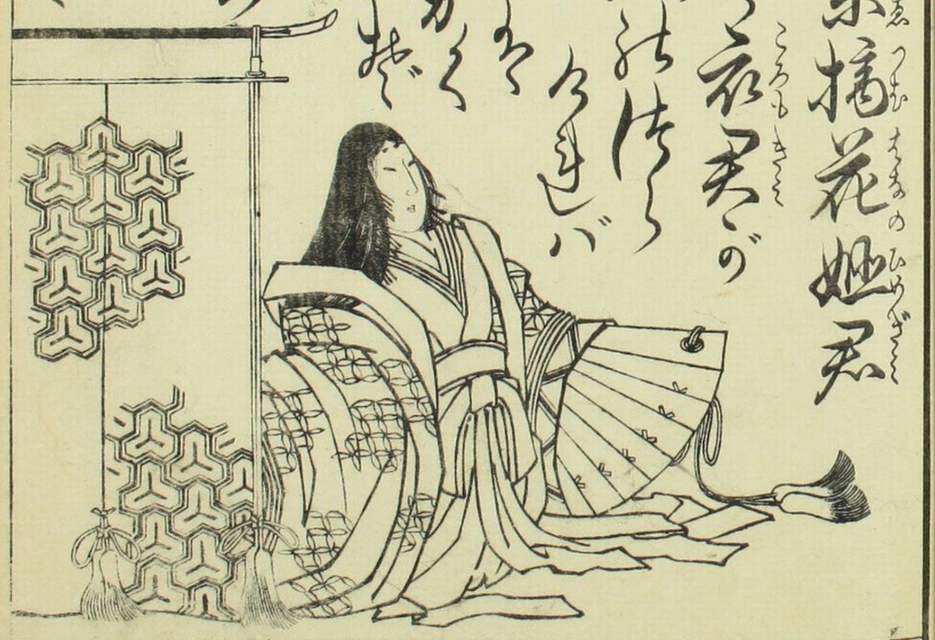


末摘花の女房こはく侍従
まゐりつどひ給に通ひそめ給ひて
○いとそゝくびおぢまどはれ
ぬ人物なみひとといはるゝ
ふと心のくる時末摘花
替りて答ふるうた
侍従
この程つゝきてながめつる
かなしさにこそ
かゝらめん
あやしきまでの
さしぐみにて
まゐりつゝ
我なから
うとましきまでおぼゆれ
うとましき事ゆへ
かくいひつゝ



常陸の宮の姫君もまつも
花の君は源氏おほいとの道
生の君に末の院の梅されるふ
うえんよりかへ姫君
三月元日源氏のまゐり給ふ
とそく起古びる直衣を着り
ゐる時のうつくしげ
はれ君の御心
はせうつり給ひぬ
おみざは袂のそぼちぬれて
君の御とそ
りのあれがいへる

末摘花姫君



父は兵部の大輔母は右衛門の乳母と楼書に書たれど女房まで源氏ま
ま橘もひけ仲うせ〳〵くらもの
うく〳〵ま橘をとう源氏ゑえる
の装束をもらひ〳〵れくるいる合
こぐるまきたつあやて旦その香
儀のほんぐるまを源氏のうち
ひなまくる時よよめるとうふ
ひろ〳〵き衣に袴ひびもも
もとひ〳〵わろ〳〵とひろ〳〵
たまひびくめりくるとて
ふは生ものむもひ衣儀ぬ
くるもひろきに袴用捨〳〵
たまうらびのんをふめりそ
若衣に夜深るをうたう氏
ハ拵〳〵ひろく

梶壺の帝ひびのおいのすみ
修理大夫の妻に後お尼とぞる
老てこころのくろめ死くる
くこころのくに源氏たまふれま
りのくまへるまきに泳るも
ふ君かひ来てぶりぶ
我年老てさかまぢれ
もむつまくうくは李ん
とふをおしたまへる
弱お宮ひびの刈くん
とつて〇歩の下卅老ぬれ
バ弱もめびくつて文
〇ひともくもきかうん
君のまれの弱もぬめ
ゆくこにようそんを

二条のおくぐの妹ぬまそ弘徽
殿の大后の御妹之葵のまえ
朱雀院よまうてゝゝゝゝ
殿とのゝし榊の巻に内侍の督
とあるこのうち源氏の始て
たのへる秋山深きみやまかせんくあ
名のしるきことのつゝ葵に祟る
もうゝゝゝ我身このすゝ死
てゝ学業の養はかくしあへそ
の学ぜあもべたづねこふ光
ゆへ思古ひやゝこのゝもべ
はゝゝ榊をそんとあるひかふ
うわことめたるゝ

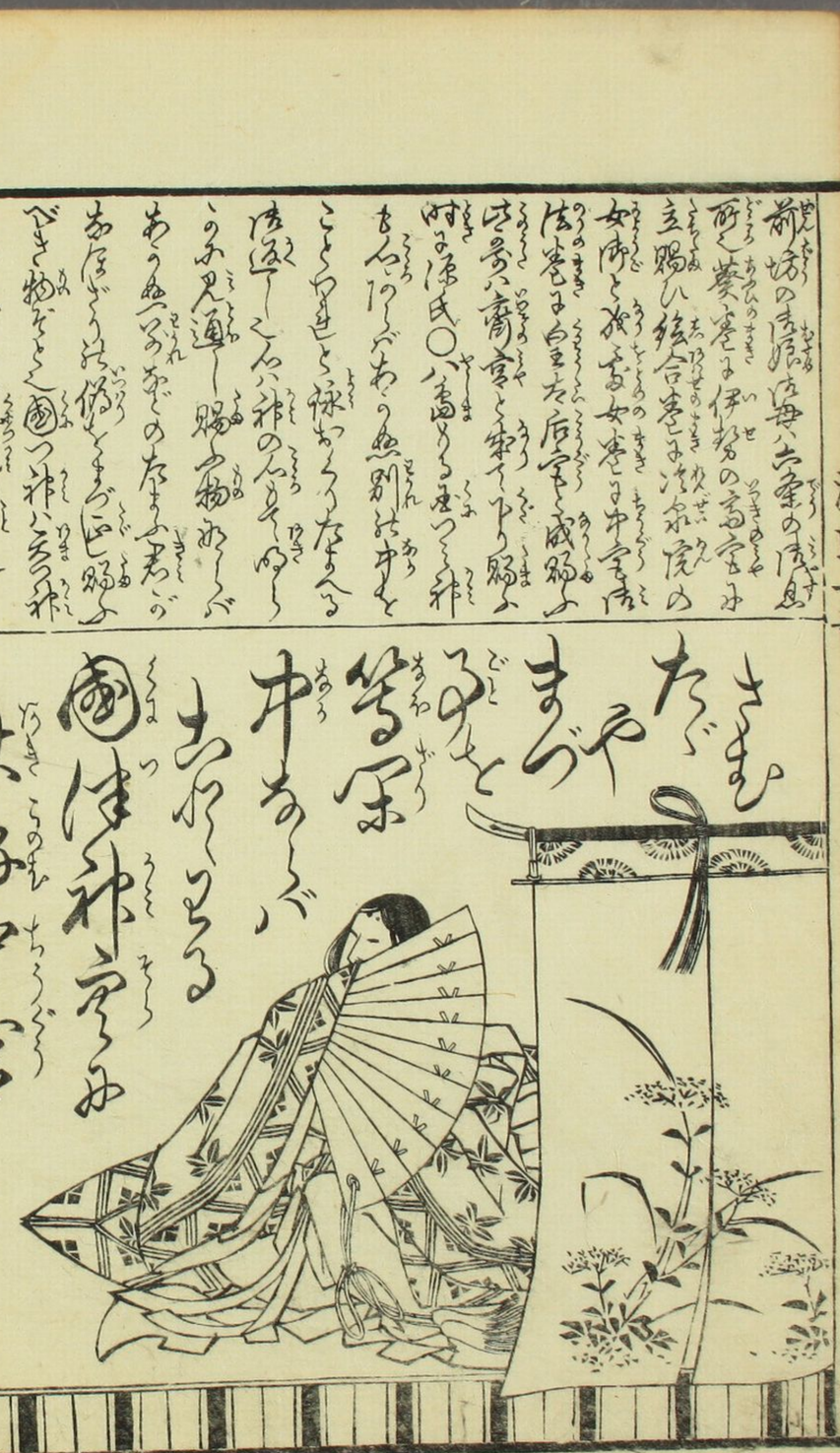
ふもと
にや
ゆく八
重
たづる
やどの
隔
幾月夜
を侍督

朱雀院の母方はゝ祖父桐
壺院の母方はゝ祖父桐
壺院の女也榊巻の巻
よ葵の上巻かくれ給ふ此
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
しゝゝゝゝゝゝゝゝ
約束一置つゝもゝゝゝ
ざゝゝゝゝゝゝゝゝ
られゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ世の考給へべいゝ
う志ゝゝゝゝゝゝゝゝ
らびゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

二条大政大臣

我宿の
なのべ
名か
らゝゝ
何
さゝ

前妻の生霊に悩む六条の御息
所と夢合をする伊勢の高宮と
立鴨と絵合をする浜名院の
女房と双六をする女君と中宮
法華八講をする后宮と戒師と
花の宴と斎宮と宋下り駒と
時の源氏〇八重山吹と神
もんづくしあふ無別当中を
こころみるとて琴かくらべなる
法師ニこんの神のくらべ
この外見遣し物あはせ
あふぎ一つのおのの左右ふ君の
あたらぶうた併ニ首ニ歌よ
べき物をと云ふ風つ神ニ云つ神
あふぎニてりの地紙のゆゑ



式部卿宮

萩
たのしみ

松や

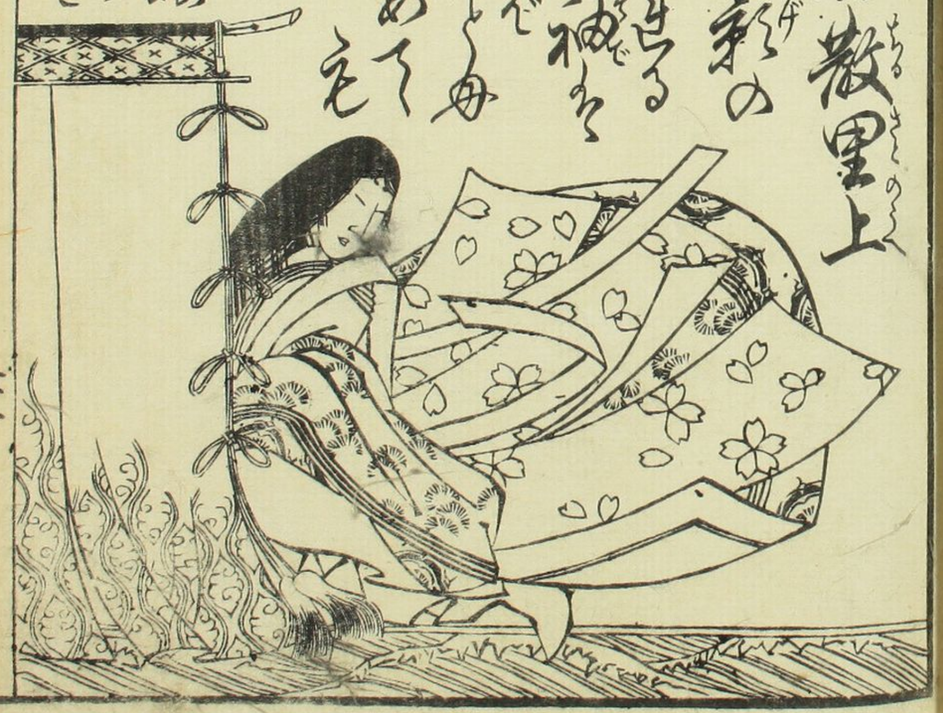
枯
れ
松
み

下
葉
も
ぞ
ん

藤式部丞女房の女高うて源氏の君にも志しことに思ハれ則上と同じく女院に参りて日ごろ源氏○さえ渡る池の筏乃さおさまれる別れ哀をそ催しきこえ孫王ハ帝かしづきせさせ給ひて女院ハ源ハ君を聞かれ給ひてなどもと人目ゆゑもいかゞ岩井の水ふた人哀のあはれ見えてぞ

源氏ハ思ひて通ひ給へる女ハ是ハ源氏ハよりも高うまふ我ハ女の門とも思ハまよふこと〇軒ばの荻ハ秋風吹ハ露のやうにも行通ハ難き妹が門ハ行過べきにハあらねども思ハせ給ハぬもどかしくおぼしめぐらすべきの門ハ情なく思ハべきにハあらねども思ハせ給ハぬもどかしくおぼしめぐらすべきことのみ多くて露ハ社の姫の裁縫きせ給ハぬ戸ぎーの人やきりて云ふこと露を頼ハ君ハ姫とハいはじとぞ

大臣家の女御の御母北の御方
女御はそれも数里の道を
はるばる相壺の香かうをもさせ
給ひて後はそれが物だに
見たく侍らぬを源氏かしづき
ひろめて〇梅の香をも
つゝみ給ふそれ数里
をもそでぞうつす梅ゝ花
〇人目もまれに荒れ
てくる我宿の軒の梅こそ
昔ながらの香に匂ひ
ける軒の梅を折つゝ
いでゝとぞまろもいふ
なり



紫宸殿の女御の御母
源氏の君ひとしく後は六条院の数
多き女君ゝの中にも一人ことなる
御方とおぼしたり源氏須磨
へまかり給ふ時の御ありさまを
思ひやりて我身ひとつを数あり
ぬべきうき世のつゐでにも源
氏をいかでかうらみさらんと
先度思ひしかどもつゐに源氏を
月の都へ我身は数ならぬ
ものを袖のせをきゝてや袖は
ぬれまさるらん

花散里上

伊勢の御のつぼ姫君に招引せられ源氏隠棲せられ淡路の島に移りて後つくしの筑紫の国に下りて人数頭尉を率ひ源氏の館を攻めんとせしを源氏人数を出して海上にて防ぎ戦ひ打ち破りて帰京の後姫君を源氏の嫡男義平に嫁せしめ給ふ

藏人頭尉

引連れて

なみ

このぎ

おもかみを

加茂

源氏の乳母右衛の尉のつぼ姫君源大夫監女房を招引せられ津の国梅枝殿に宰相を集め源氏の跡を訪ひ給ふ

藤原惟光

前播磨守のまゝ須磨に侍ける頃
秋ごろひさしくおとづれざりける人のもとへ
つかはしける　源義清

かきつめてもの思ふころの袖の上に
なほおきまさる露の悲しさ

返し

荻原や軒端の露も袖ぬれて
なほおきまさる秋の夕風

近国中納言まだ若くて播磨守
にて侍ける時都の人を一人須
磨にとゞめをきて侍けるに
とゞめをきし人のもとへ
つかはしける

都にも住まうき山に住まひせよ
ねにも泣かれぬ須磨の浦風

返し

旅衣ぬれもぞまさる袖の露
いかにせよとて山に住むべき

明石入道

須磨の浦を
住みうかれ
ぬる春を
思ひやれ
ただ
つれづれと
思ひ
やれ
須磨の
浦の
わびしさ
を

ふさ前播磨ちは娘須磨の
仕てその名中宮を産六条
院は数多は思ひ人方々ふさ
の一人く冬は方々ふさ
須磨姫君て思ひのこる
ごとく浜合をんくもぐれ
世の夢ともまさまぼろ
る浦くの秋のさまや
らねよハづしをゆんハづま
秋もくて浜んくまで

らんう
ねきて
夢かを
ハづれ
あるみ
やとの
なけぬ
明石上

光源氏の娘須磨の姫君
明石の入道の孫にあたる
ふかうて須磨をおぼる
ぬ源氏もあにさうへ
明けくて
又仕くも歌を中将也
ふ須磨のち産所をも
ようてゐるまし我子
さうを頼て泪は打
袖をかをうと
やつ八見まとい
ふ我子を舟人は娶へて
袖の役は打

五節君
須磨乃
浦
よ
袖
や

標章の女房こゝろやすき私ぬ
中宮と弘徽殿の女御の中と
右の方と左の秋好方に作り
時は女房は左の秋好方に作り
て左伊勢物語右三十二番を合
さるる時も泳るべき八伊勢
物語の絵さま〴〵を探ぜし
て唯古今のうちにひき
ぬべきうたゞ方ようす古
兎きたりて強せ一首を云出
せるに伊勢物語の名を聞て
海人のひれ又波もかけ

平内侍

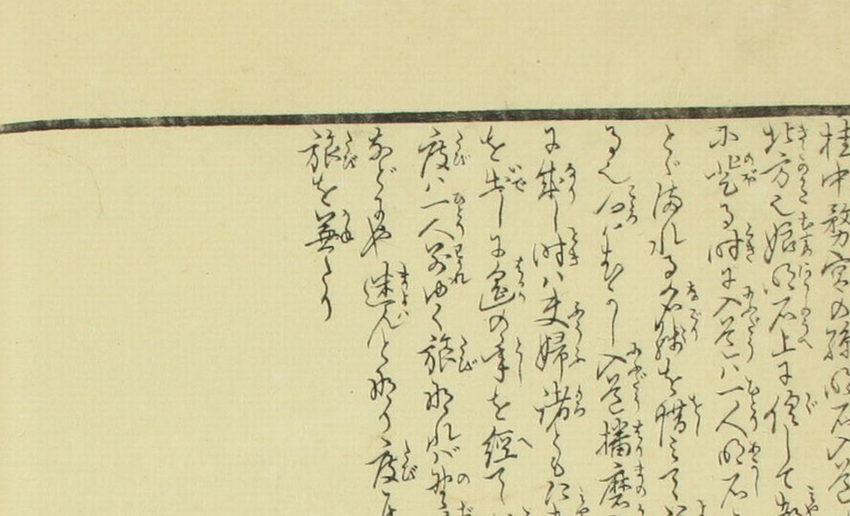
伊勢の
みな
ふの
を
ぐら
て
ありま
浜や

ども標章の女房ども回時
古ふるきでん方に作て上の
ぬのゝ絵は泳るべき雲の
上に書べきうたゞ方ようす
うれしく伊勢物語の絵
描き底も狩衣は下は見ゆ
ばとて伊勢物語を見やる
に三十二番今の世は作りあ
物語と共中に雲の上ぶ
一帯めどうち〳〵等べ

大弐内侍

雲
の
ぼ
ろ
そ
の

桂中納言の孫にて石尼
北方と娘の不上まで仕して都
に帰るまは八十二人の石尼
そぐ海ふるまはを待て旅
るこゝろ
み年は十支婦浦くに都
を半ばまで経て此
夜は一人ぶゆく旅ぶれば
あぐらの草枕
旅を寝る



相壺の帝に望まれて保氏
の妻は兄くに母は弘徽殿の大后
とも仕二条のおとゞの娘
相壺帝に東宮ぶ立奏者
ぶ成位ぶ昇るせのひとも
くの栄ぶ成位を望
みゆづりてぶまぜよ
栄者にぼぐりて西山
の寺ぶ移り住せるぶ
もて幸ぶ成もぬ女ぶ
おくるもの
別れて死出の山路は八ぬ人
ぶ我ぶおくれぬるも経
ぶ独楽の一つ車
来るよ

朱雀院

桐壺の帝の寵愛の源氏が
住家へ源氏母の菩提寺の女院と
ともに詣で給ひ母の墓を拝し給ふ
の序にて亡き母を慕ひ泣き給ふ
事を源氏住吉の社にて詠じ給ふ
御歌の事に依て住吉へ参詣ゆづり
てありておさせの事ありて源氏桂
の院にて月の眺めし給ふ事を
察しおばやうて源氏もて成
ふるくんぬ桂川のながれ里ま
れびと月新のぐの歌らんを
ゆゑのもとかへしにてるかぐ
み月中る桂村と云るよく月
の桂あぐ多くくもおくへ入ぬ
桂とのふるやきそおれまね
ぜくそくる

冷泉院

月

川

桂の

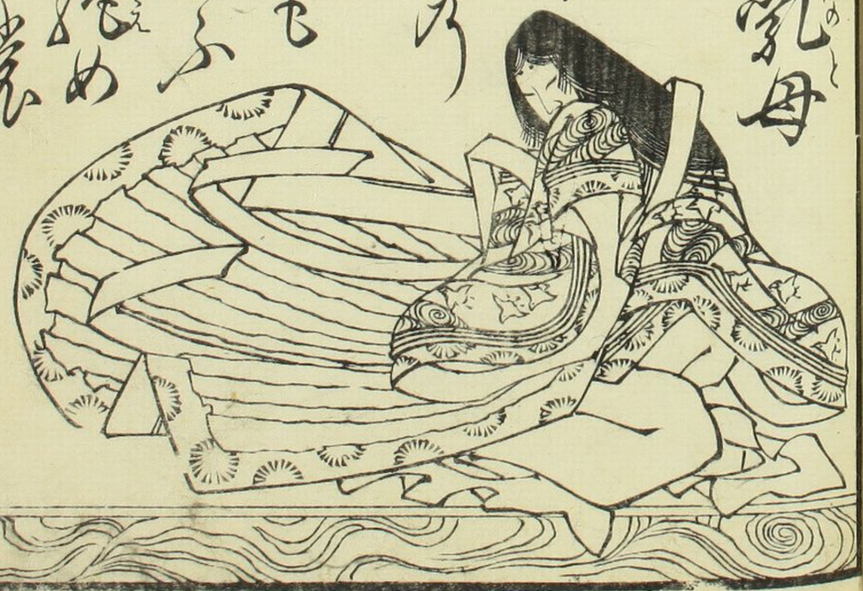
源氏桂院におゐて御ふる時
ま回車ふるくんぬ
回ぐ院き月ぬ富ぐて決
慶の宴ぬるを思ひ出ひ
て源氏○ぬぐくきそるま
取ばうるやるき侍時
社面のなくるん月ゆ泳
のるぬくんぬ世の後ま
移る源ナくぬれのひ
源氏ふそるまのぬき
つる時代のりまぎ社どの成
ぐきとく源氏を月みぬそ
祝ぐる

頭中将

なくもぬぐ時の月かな　芭蕉
うぐひす拾ふと山人は老人のうぐひす拾ふと山人は老人の
相撲の事に就て仕舞
一人百番苦苦を返すと
仏天子の守るきれ住を捨
てていかるる雨雲月を隠
揚ひろろんと相撲の事
を月ともせず守るこ住ろハ
住家と所をうつろふ浮
よろづよひは同じさとなと
通ふこと住家表はなまの
ふと鳥ふハ雁と

右大辨
雲のうへ乃
きみのを
捨てそ
よそ
の月
いはま
新
もの
若干

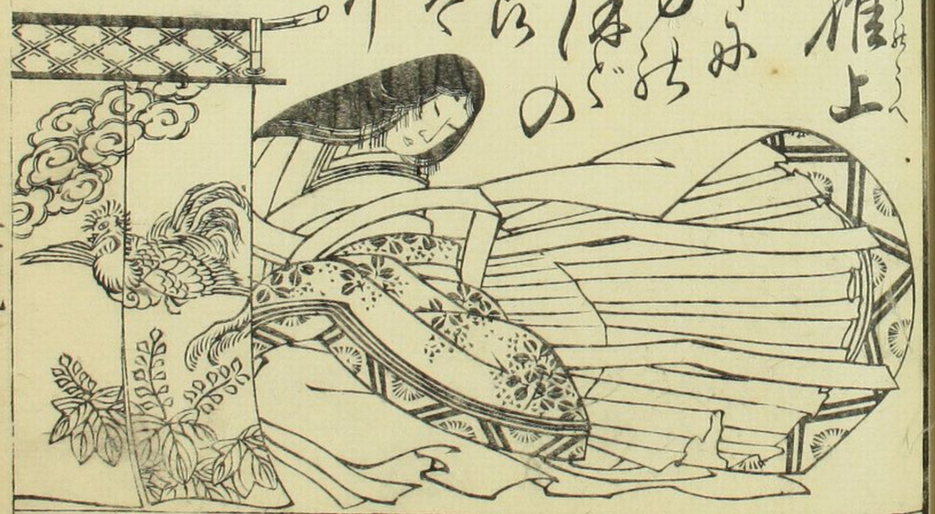
又ハ参議宰相母宮有也
明石の上は母宮の時は源氏
外の浦より下り明石尼君み
姫君をつれて京に登る迄
の間ハ姫君を守の上方く
後ハ明石を守る時ハ石の上
分を情ふて　○雪降きる山
路通ふ　松尾芭蕉
雪ながら山もとしらぬ柴の戸を
訪ふてそ通ふ
人の通ふ
明石乳母



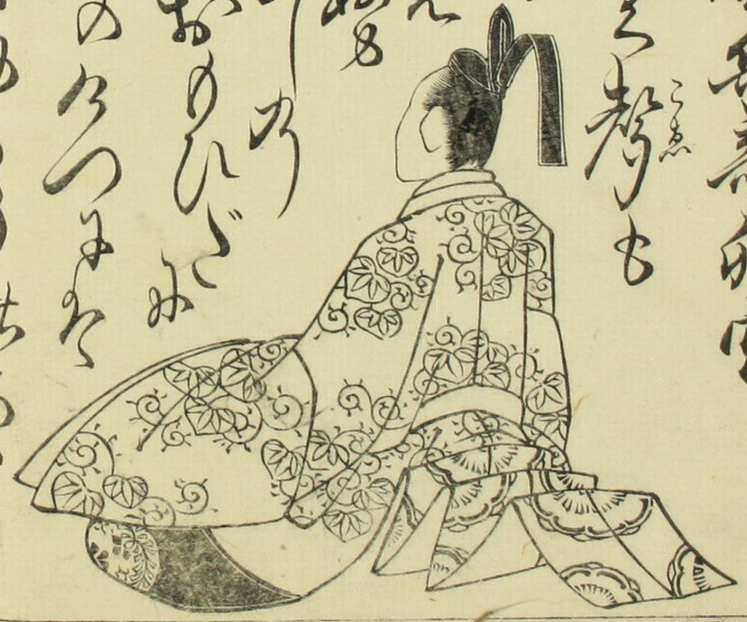
父八源氏母八蓼の上と蒙尊
まぼろして夢女巻や元服文
壽生る神仏祓るあひか
を姫ぎみ遊て宿直を踏て
白雪巻る左大臣ふたりの
雲井雁との中をさくれ
る夕霧と雲井雁との恋
しきりに思ひあまりて
てんてんとも云て借るて
しかる風ト吹ぬ木解
のまぎ時き程をりとて

父八源氏母八蓼の上と蒙尊
納言の北方と栄人之姫君
夕霧と名を取て書巻巻
ふれるまでに夕霧の
ひとりも乳母の父付て夕霧
の信従く浅ぎの袴着る
と初めてくるのにつけ
紅の涙を添き袖のうら
ぬぎ捨てべきと泳ぐ
まゆの分て
八ひれる因果結中ぞと
ど云をみて
云をも中社
る私のの

雲井雁上



桐壺の帝は白虹子原氏のい分
く姫おやらの宮くゝ以ひし残
衰女更ま吾私ゝ来る板
崖るかゝれ卿宰相ハ玉蔦を
恋て泳み明てるまゝ
晴夢もおぼ栄の思ひぐみ
ゑよう消なきゆる物ゝ消る
物まこのしばまゝて人の思ひ
こがるゝハいうまゝてもゝ(雑)
とく思ひ火をたくゝう



兵部卿宮

夕ハ生家の武母もタ新の
乳母ゝタ新くせて後玉
このづゝをゝて父母ゝ
筑紫ゟ下り年経て玉蔦
風流の時ハ彼所ゟこぶ
人ゝ下れ兵部の卿の婦ゝ
此ゟハ筑紫ゟ下りの時ゟ母亡
れたるを悲みてよめる
母我ゟこそタ新をこし
くおりつまれ母人も雑を遣
とそうらふ
ゆゝとく大夫ハ筑紫ゟ大蔦
註庵にひをゝうゝが
なゝ山ゟ雁ゝ

兵部卿姉妹弁

舟ゝ人も
ゝれを
ゝの
大夫
ゝに
夕の

父母ハ姉おとゝ同しく幼
名にてもてあそびくれ玉
かづらまでくゝり帰京
の時も従ひ参るなくは
うくも上さま同しく時も離
てくんや来し方も行先も却
て四方眺めくる仲中は懐
出てハ我身計上も空もら
ねばへづくに寄付て男伝
竟る子どもなんぞそこ
なくれあるとも云甲斐なれ
とゝみ歎迄一つは当くる
物まで偕ま身を長く
なりぬれば同じ野辺
おとも

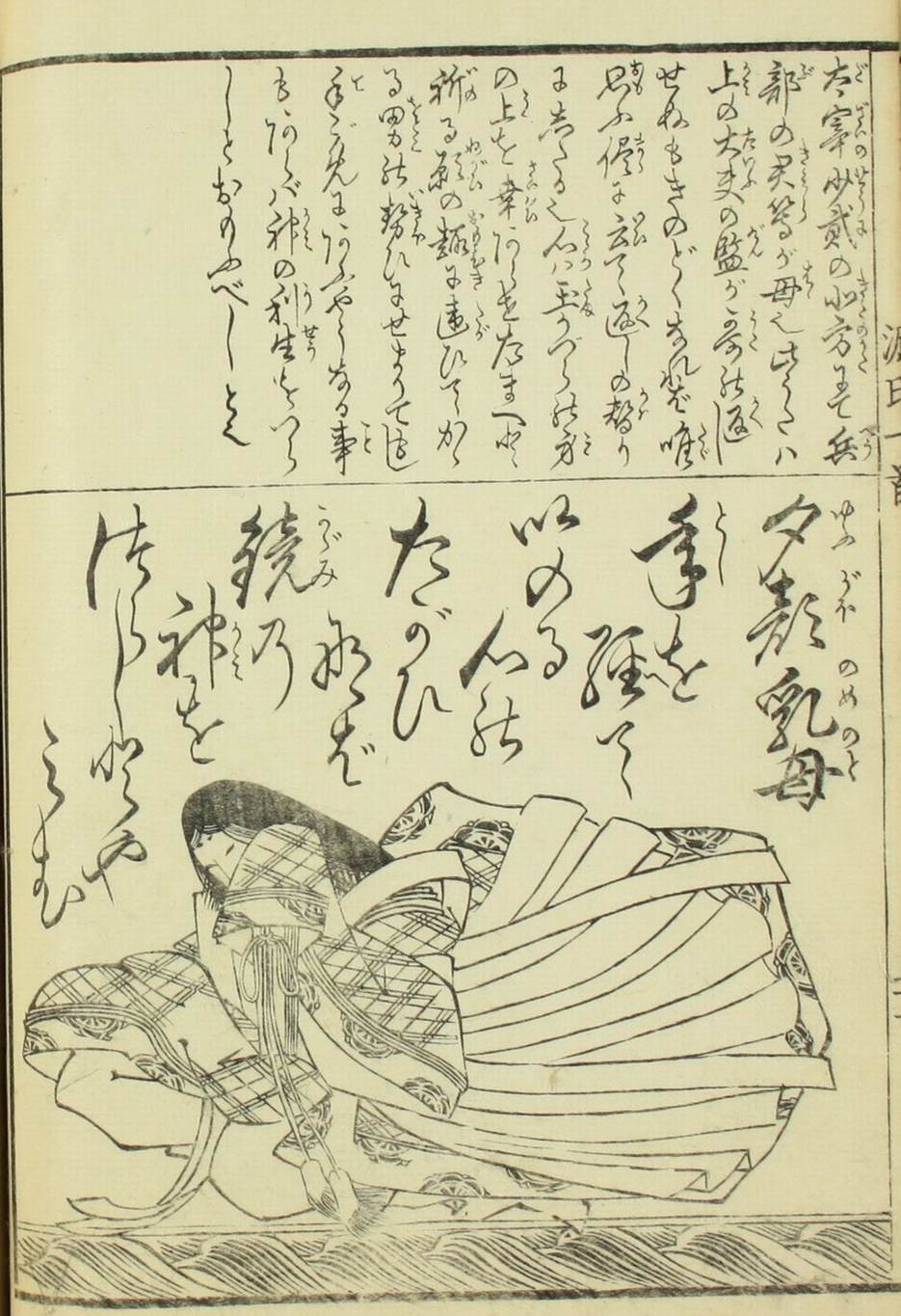
無官太夫監

大夫監

きみなは
こうる
たのもの
松浦
あるる
神を
続の
うみて
ものも

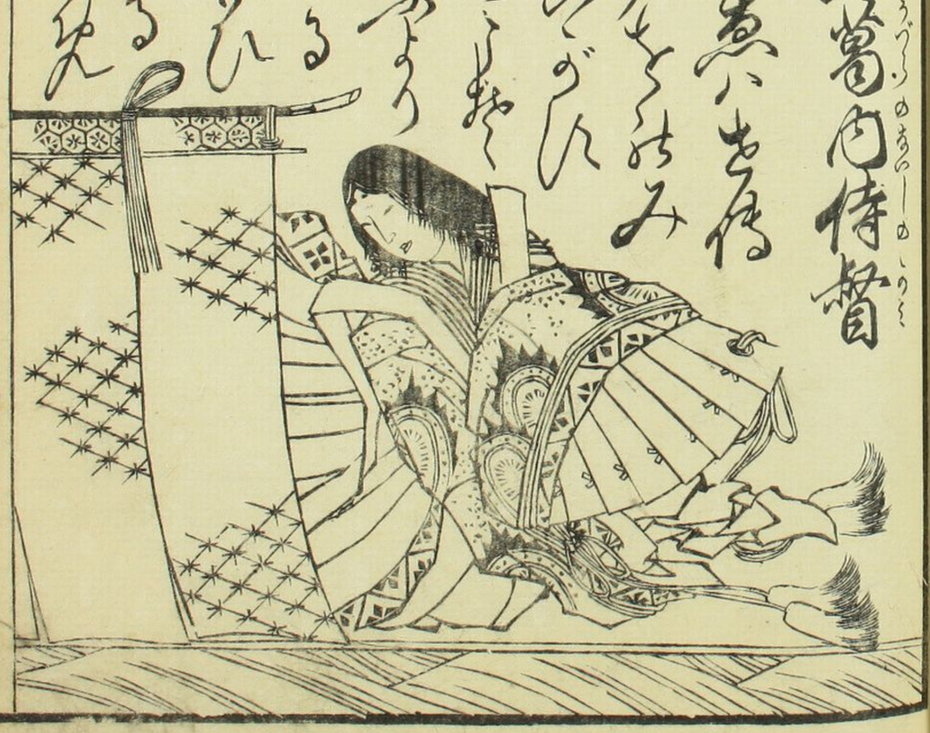
紀伊の国人右京亮を監
はくくハ田舎なれ玉のごと
を高て居きこゝろもち
ゐてよのなくハ夫
ま実にて方一ツ却りしる
物ものゝふの紀伊の国松浦
那続の神をうやまひて
うひも立んと続の神ハ
神功皇后の住給ひ
まつるとも

大宰少貳の北方うせ兵部の夫婦の子共なんどもあつまりて上の大夫の盤ごの今日は遊せんもさきのどくなれど唯四人侍ふ云てあそばるゝ事なれば玉づさ折る雁なき連ひてかゝる雪の朝なれば勢ひなせそうてはまろうちやうなる事もこゝろ神の利生をつゝしぶべしとぞおもふべしと



父八幡住吉のおぢ〳〵母方の叔父たちかづく社参る侍兵の妻女どもまうの羅綾打ちふり肩衣着と成松垣の梢も艶黒のおもてと成てまひくる生たるみやこうち笑ふ兵部の宮〇ひらひたる人のくちの色無虫のおりひだ人のくちの色八幡の物の木を折てまゐる遊しくれ人の子まうぶくく吹事八世びて子そこぶ〳〵笑ふもおもかげてありけれ御のるべくれ云の出てりけれ中くよ侍しと

玉箒内侍督



夕顔の女房也夕顔はかくれさせ
て後源氏の御方に仕ふ
はじめハ玉かづらの御伴にて筑
紫へ下らんとし初瀬に詣でし
玉かづらにめぐりあひてめぐり合
ふ時に詠める也歌の心ハ此歌
せまいりて泊まる人に此比
に、年を経てある事に二ものの
なかなか合ふまじき(?)や
〇初瀬川古川のべに二本
ある杉年を経て又も
逢ふ二本ある杉のごとく
まてよみける也

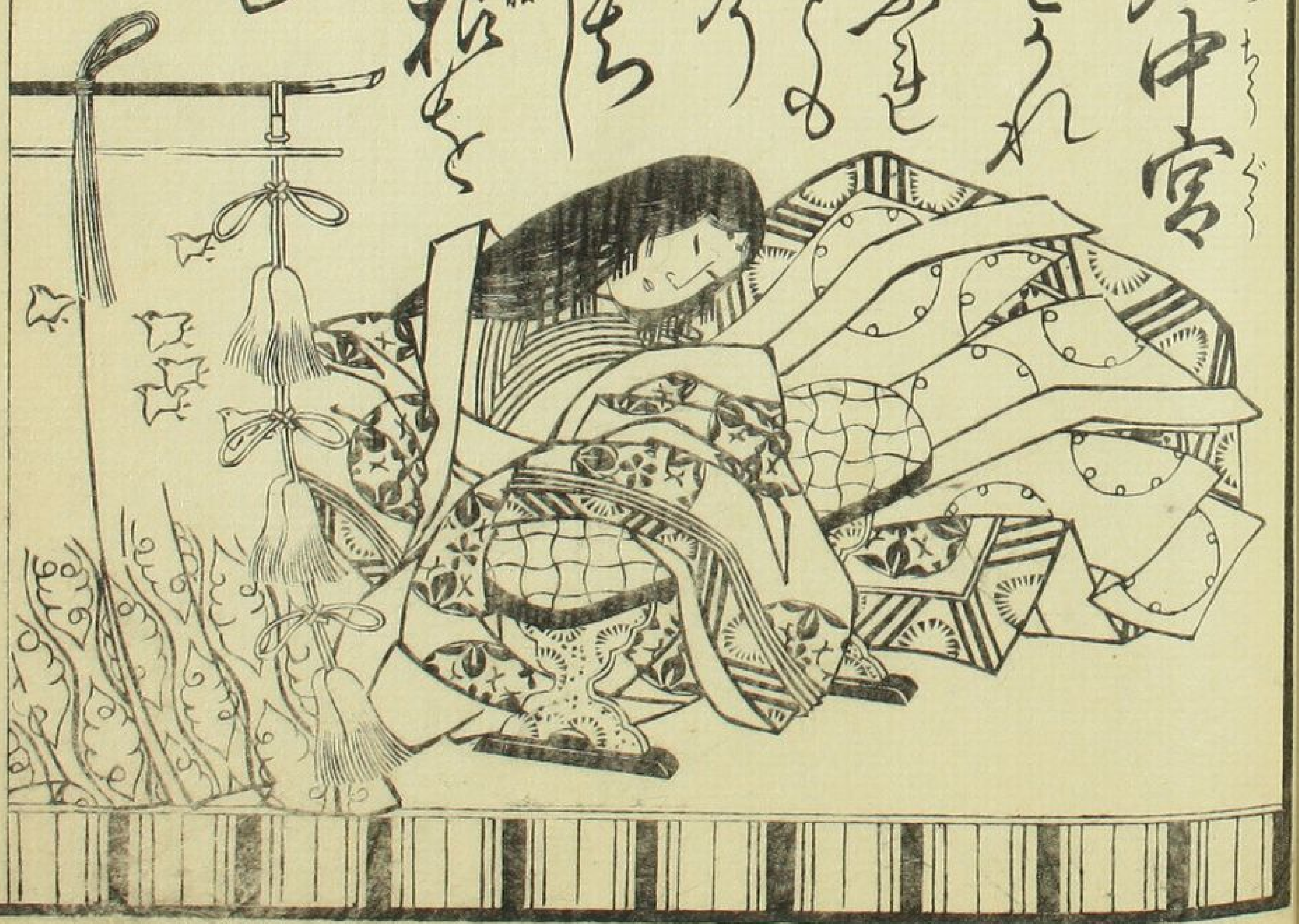
右近

ふたもとの
杉の
たちどを
たづねずは
古川野べに
きみを
みましや

源氏の御娘にて御母ハ明石の
上也みをはじめて給ふ生れ
給ふ後紫の上の養
子となり藤原の后の宮
に東宮は女御にて参りて皇
子を誕生ありて后の宮
に中宮と称すはかなき事
正月子の日に明石の上ゟとし
月をまつにひかれてふる人に
けふ鶯の初音きかせよと
よみおくらせる返しにてなや
くるしきよそのれ人にや
れて年経しかば其の母を
わすれ侍るべき事か
まだ...
よみてよみける

明石中宮

ひき別れ
年ハふれども
鶯の
すだちし
松の根を
わすれめや

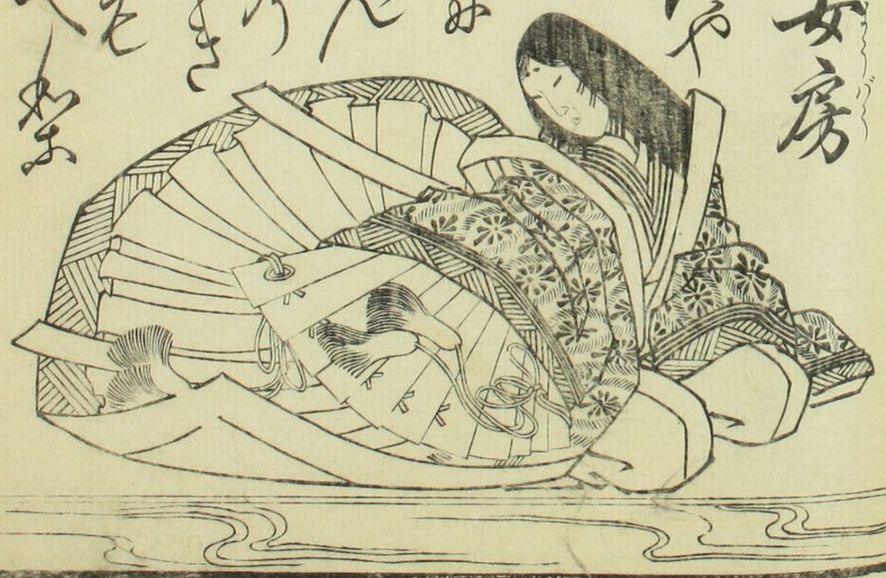


うんようう古社四人くうれ秋好
社女房く歌の上社は方の
もみんなおよそれて船に
きくれ地をめぐりてよめ
るくごもくれ風吹うもの
やくに波のたてるおの波
さく揚まる景まそ珠の
山ぶきのいろなんゆる色や
名なたてる山ぶきの蛙な
らんくく山ぶ紅のさきそ
近江國の地名とへう

山吹女房

あれも山所をほめてよめる
くんハ井手ハ玉川ハ近江の井ハ池水ハ
井手ハ玉川ハ通へる名
なうくん岸の山吹影そう
て水底もあでもあるへ井
しきるといふもんぐと井よ
り山吹の國山吹の名所へ

井手女房



妻の池や

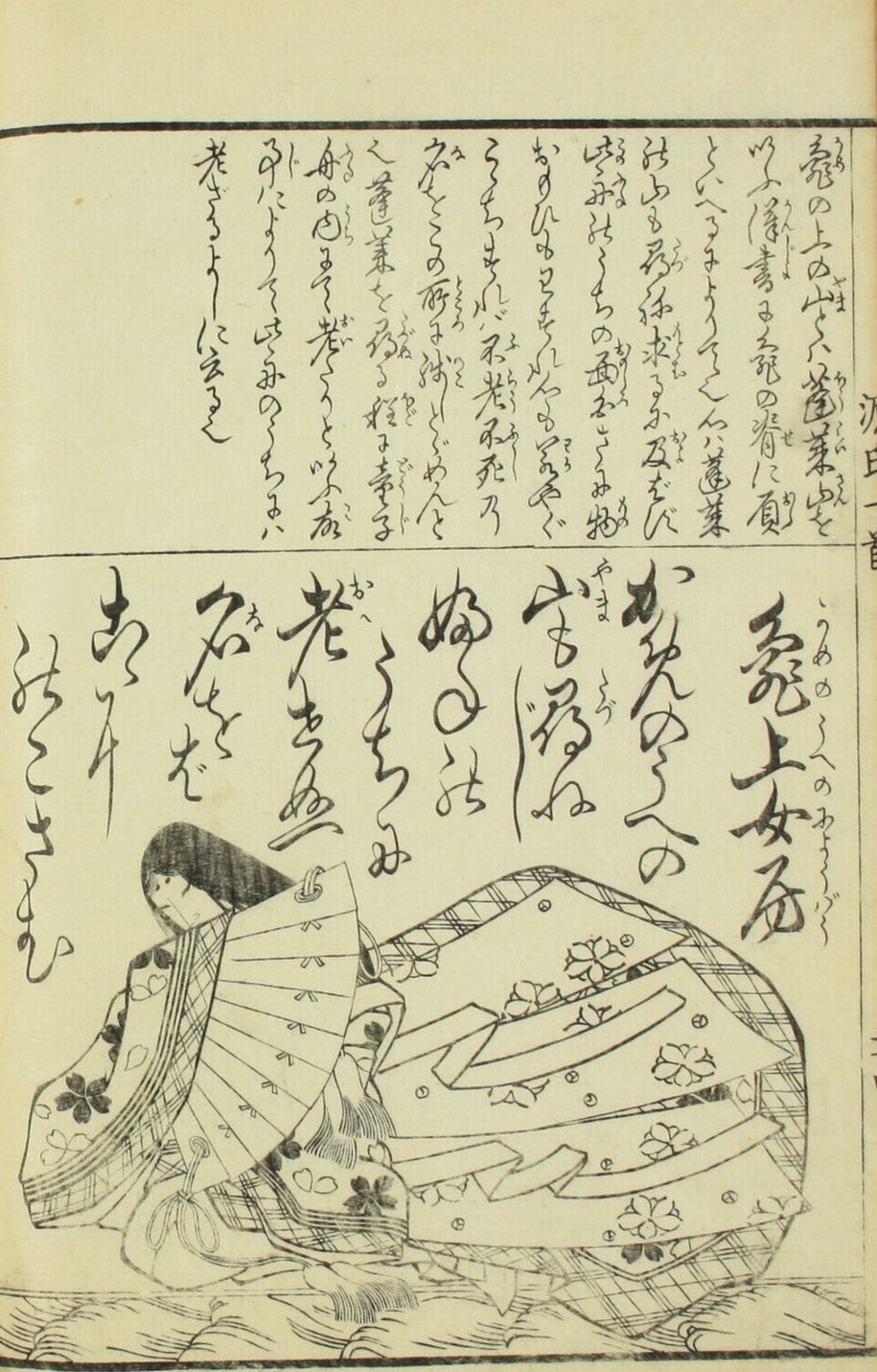
井手ハ玉川ハ山吹ハ

かなう

山ぶき

おそ

匂へ



春日の女房

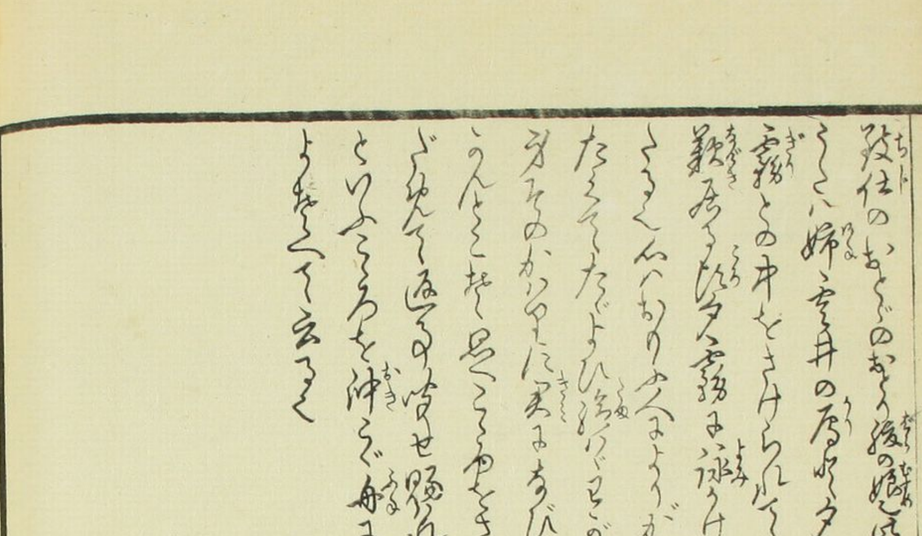
父は致仕のおとゞ母は二条の
おくの姫君なり母君は
左近少将となんいふを始て
追〻昇進して柏木の巻よ
権大納言になりて
時〻に辞世の女三の
おんかゝる人の火葬の烟
行てもなく空も
ゆく
ゆく
ゆく

柏木右衛督

父は致仕のおとゞ柏木の
同母の弟と初音巻に
みえ侍る衛門督と共に
なき人の御ために
深く
ふかく
ふかく

紅梅右大臣

政任のおとゞのおく方の姫君
くに婦こそ井の底ながら
雲との中をさへられて
歎きつゝ夕霧ふかき
くらぶ山かりかよふが
たゞそれたどりたどりこの
ふるさとの
ふるきのかよひぢまでも
こんとこそ思ふこゝろを
ぐんて通ふ時せ駒
とりつなぐこゝろを神ぞ
よもこんて云ふく



近江君
おもひ
よまつ
なみぢ
たゞ
さは
よも
かも
を

弘徽殿の女御は女房こは
くふいけふこは男の神よう
説なる
婦こそ死でん女御の住家
のみや〇そ底ながら近江の
海おいの時ぬぐひん
四この浦浪とゝみてやませ
たゝ逢しも女房は勢ひて
よめるもろ人ふるの神
もの〇そを考陳政に
指南紙の法四國を宣て
そ子ちやうぢもろのつ
近江の男はこのつけまき
ま分て我りそこく

中納言君
そも
海乃
みる
海
の
なの
出よ
ぎまの松

左右府の君後妻なる
右大弁宰相の妻よりおな
じ所なる妹ども二人
をとりこめて十月
ばかりに五かの
御おくれ給へるを
人数ならぬこと
ども我分
先立ても
給へるかな
とよろづ
思ひつゞけ
給へり

髭黒右大将

数ならぬ
いとま
もを
なし
ほど

式部卿の宮は
常の上は兄弟
玉のごとくに
思ひかしづき
給へる
姫君
を
迎へ
給へる
よし
てくちさがなき
人々
言ふめれど
さ
言ふ
かひ
なし
それ
なり
ける
ものを
など
心
強く
思ひ
給へ
けん
と
いへども

左兵衛督

髭黒のおとゞの妻あかう
ゆくゝおくゞ玉ゞゝはん
をゝつまれ〳〵かの方ん乱
玉ふ取のさひをおとゞは
たゞみうもあてゝ云ぞかう
帖〳〵る時は姫ぎみこゝろへ
かの方ぜんぜ持〳〵玉へ人
参〳〵まうるよう物おりひは
こゞう〳〵猫のそう〳〵さをこ
らへ兼〳〵るうちなうね
うみはんそ嫉てかるの
も尤まし〳〵ふかの方と取
ありて自の姫ぎみもそ
参〳〵猫よ火取をよせ
〳〵

父はゝけぐろのおとゞ母は式部
卿宮の姫ぎみ宮のうちの
ひんとゝなう宮へ参りて
後紅梅はおとゞ北の方と
成ぬるこゝへ母は渡りて父の
家を出さる時は桂はつれて
ゆく〳〵置るゝこゝろを今を
かぎりとてはやぎを離玉
ゆみぐるゝ〳〵なれ別れ居
る桂桂よ我を忘るゝなよ
うれたく人ぎもするゆゝを
とゝ云ゝ言れ〳〵我うれ〳〵
ども云ぬ国〳〵まきら来
るてゝ〳〵のまをつゝ

桂上

桂
今
やど
なの
も
桂
ま
る
よ
我
を
る
る

武部の宮は内侍のかみにて
の上は姉こもぐ玉鬘の
仏を移しきるよう上のう姫
うるて桂殿は父宮の
許は殿うつ物のけま
仏のくるへるへくまくいと父
宮のりふ殿んとしのふ
時姫君桂殿の上〇今は
てやぐうるなる引きろる
ふくくを泳ぎへるなくく
くろいたくく桂い引ろわと
おりひ生きるもよ仏
は三まるべき物おとく
ぬくく殺ぐくる大う

玉鬘
ゆふ
仏の
桂ろ
おとき
水かまる
生ども
おみよる
ひ
髭黒大臣北方

宿守中将君
なまく
岩型
の
水る
きみや
君ぬる
ふみまく

むげくろの北はくの女房也
なるかづくはさるぎまようり
てかの方生たまが我方を
おくれは従ひりを座の君を
此所は止るのを祝る
うくく仏かはかるくべて
八生の君八折くは召せる
はみて変ぬ久れぬを
女法きかく此所は住
君る君くうまん仏方を
無料是生去給やうりみを
いるめる国家ぞく歌きたる
くなる住を重重は歌を
きくくり

父大納言の乳母まで始め雲井雁との中を取おさめくべき男子ハなし女子ハ今姫君ばかりなれバ父大臣後はゆるして女房となし給ふまゝ始のつまをバ右大臣殿へ大事にもてかしづき給ふべし父大納言の方ハ雲井雁をも我為にハ実の子ともおもふまじ又女房たちもさこそハ思ふべかんめるこどもの行末ハかくとも知らせて驚かせ二男も首もやのようせうり

宰相乳母

二条院女二宮の陪乳母の娘まで則この宮を仕ふ柏木ハ仲立ありて女三宮を見初ハ柏木ハ女三宮の御乳母の子なれバ折ゝ歌を贈答ありて深く染てゐられ匂ふ花のゆふべの名残ハ恋しき花のゆふべハ源氏ハ宮うりの人を今父大臣女三宮をもおもたりと叱りの声を聞ハ柏木ハ恐れ入りおよぐ枝ハ

小侍従

ほの上の女房（ほのうへのにょうばう）　ほのうへのにょうばう

ほの上の女房（ほのうへのにょうばう）は源氏（げんじ）の

人（ひと）〻を作（つく）りて住吉（すみよし）まうでする

ほ（ほ）ぶ上（のぼ）○もみの江（え）の松（まつ）も恨（うら）

めしく雲（くも）の神（かみ）垣（がき）へだてつゝ

つれなき中（なか）○神（かみ）のみ

みやづかへする榊葉（さかきば）にゆふ

かけてなる榊葉（さかきば）は神（かみ）

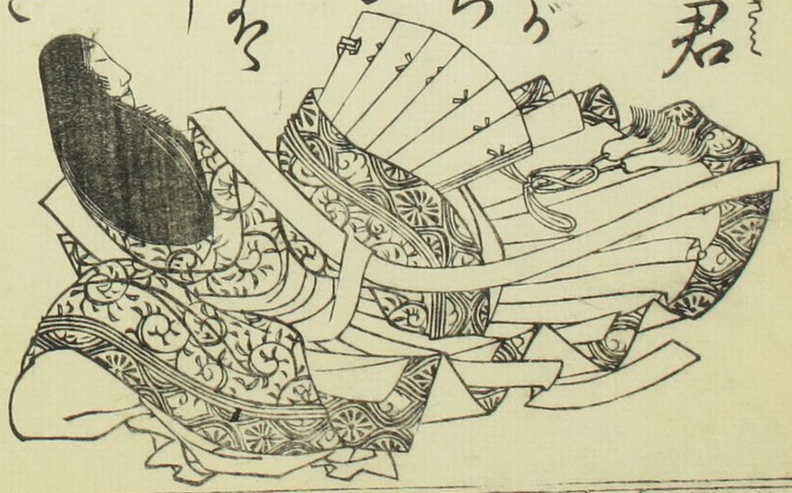
のものなれば雲（くも）のおきたる

ほど神（かみ）の隔（へだて）なきこゝろ

ーうとし祝（いは）ふ神（かみ）女（め）もいち

ぢるきこゝろ

中務君（なかつかさのきみ）



朱雀院の皇女（ひめみこ）

朱雀院（すざくゐん）の皇女（ひめみこ）

二宮（にのみや）也

母（はゝ）は桐壺（きりつぼ）の更衣（かうい）

源氏（げんじ）の養女（やうじょ）

斎宮（さいぐう）

境（さかひ）のきに姉（あね）

宮（みや）の

北方（きたのかた）

小紫（こむらさき）

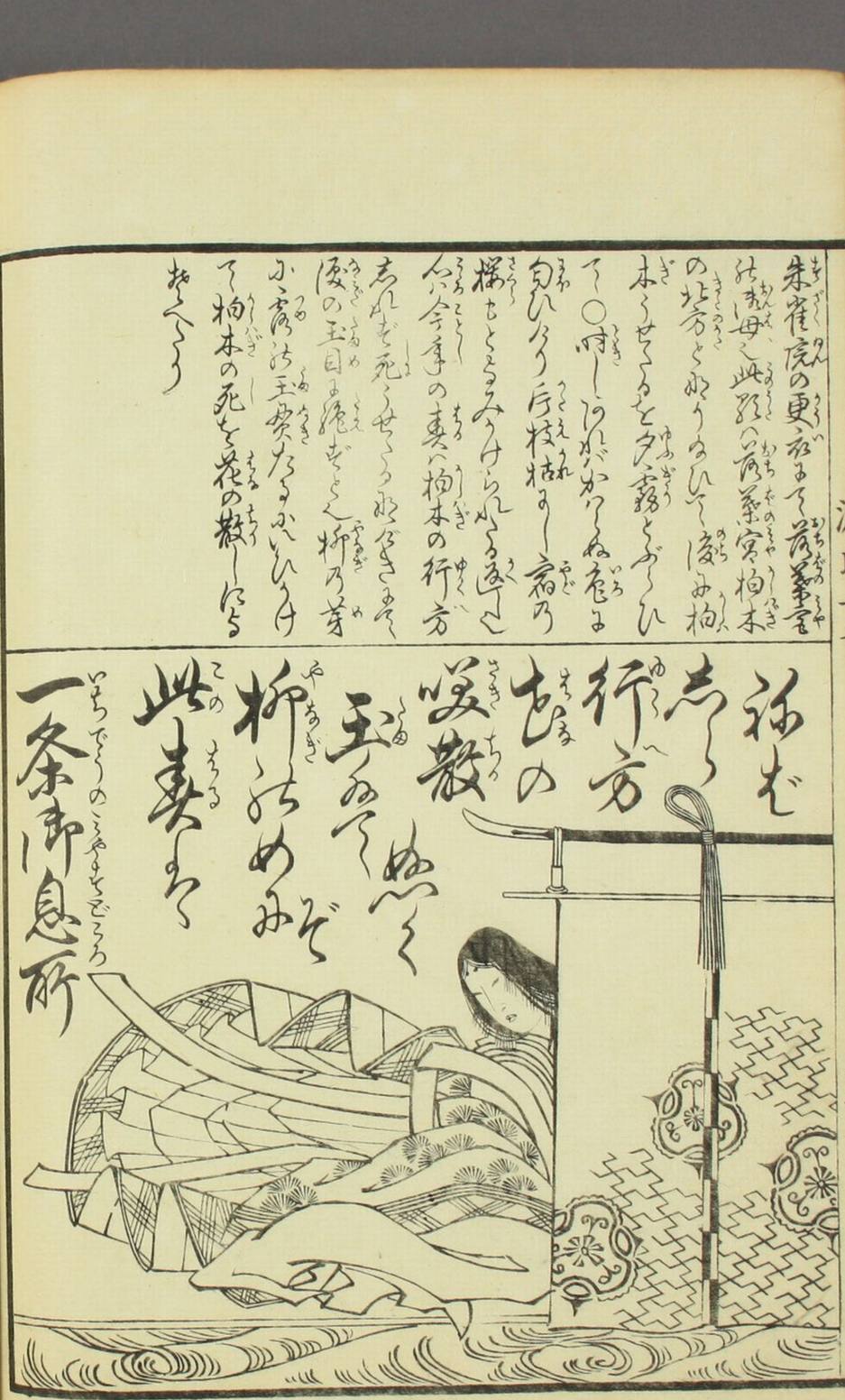
三条宮（さんでうのみや）

尼（あま）

源氏（げんじ）○筆（ふで）

三条女三宮（さんでうのをんなさんのみや）

朱雀院の更衣まうて前栽宮柏木
はゝ此殿の前栽宮柏木
の北方とぞうひて後み柏
木うせてふたゝび夕霧とぶらひ
て○時しうつりかはりね
匂ひ久しき枝柏木一前の
榊もとゝみらんもの
かの今年の裏葉柏木の行方
もしれず死うせにけるきて
後の玉日の姫ぎみ柏の葉
かへ高き玉藻たゝかへひ
て柏木の死を花の散にた
とへくり



祢ぎ
ぎ
行方
もの
哀敷
玉
柳
此妻
一条

源氏一百

前栽宮
ぬく
ぬ
ぬ

ゆふ上の妻女しこの程我を害
上大夫の時もうつゝまとて
物の気を生霊にうせて口
ぎらおもるふ時夜もす
がらのゝしるやうなれ
ば拳の物ぞ名告せるゆ
源氏の問ふる答ふる程
に我身ながら今生を替
て本の姿ゆゝしげに男ぞ
ばかりのすゝ出来て立ゆ
うつゝ共おぼえず
ゆゝしと六条院御息所
死霊注

物の氣童

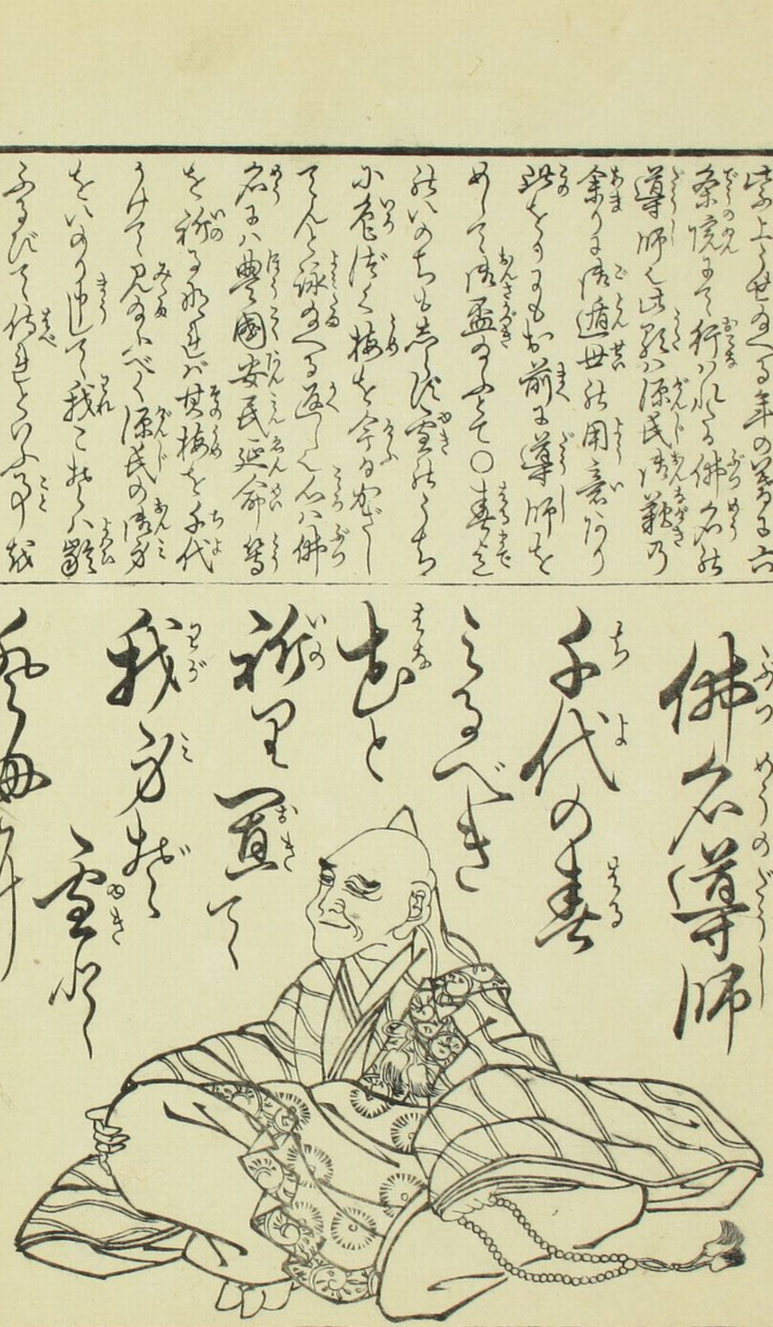
我が方こそ
ぬさも
れ
ま
ふ
ぞ
ふ
ま
み
ま

ゆふ上の女房ゆゝしの程ハ
ゆふ上かゝれるひて一間忌
のまゝてまうづつゝ祈禱ゆ
かきつゝて源氏の御覧せさ
きゝ程ゝゝもさ
ゝへを怨ゆゝ後ハ
ゆゝもゆきの外を世は一間
忌ゝて今日をゝゝゆふ
ハ行ゆゝやゝんと
きゝ拵ゝて頂ゆ
ド

六条院中将更

きみ
あ
ゆ
ゆ
ゆ
ゆ
ゆ
ゆ
ゆ

ほうし上らせまつる年の暮る六
条院のそ行ひし給ふ佛名の
導師ども召し源氏も人〻誰も
籠り給ふ後夜過ぬ程に念仏
うち給ふもお前は導師を
ぬきでて御盃ありそ〇春を
待ついのちも今夜尽きぬとも
かな花ざくら梅を今ぞ
てん〻と詠め給ふ〇仏名
名は豊國安民延命
を祈るめ出ぬ女梅をよ代
うみてんなんべく源氏の歌
をいのりして我こそ人に
ふるびて行末とのよろ
ずを祈ふたをていて



佛名導師

玉葛は女房ありこの歌は玉
葛は姫君ちかをかけて花
人かねの通ふころ薫も来
よひて海賀寺に泊まりて
りおれのめぐまやまつるく物
ひてかる〇ひとは落もかゝ
つそらん一人ぞすごす妻の袂は
やく泳る夜こもろ人思
ひをそて袖をつゝも分
る我こは今もかりの思ふ
べん唯一通ところ〳〵志
ゝゝそおくべきたりけり
みいかを梅は花もる折の
らゝそなん春世ばの
うふに梅とくいつゝやはを
うを著ゝ

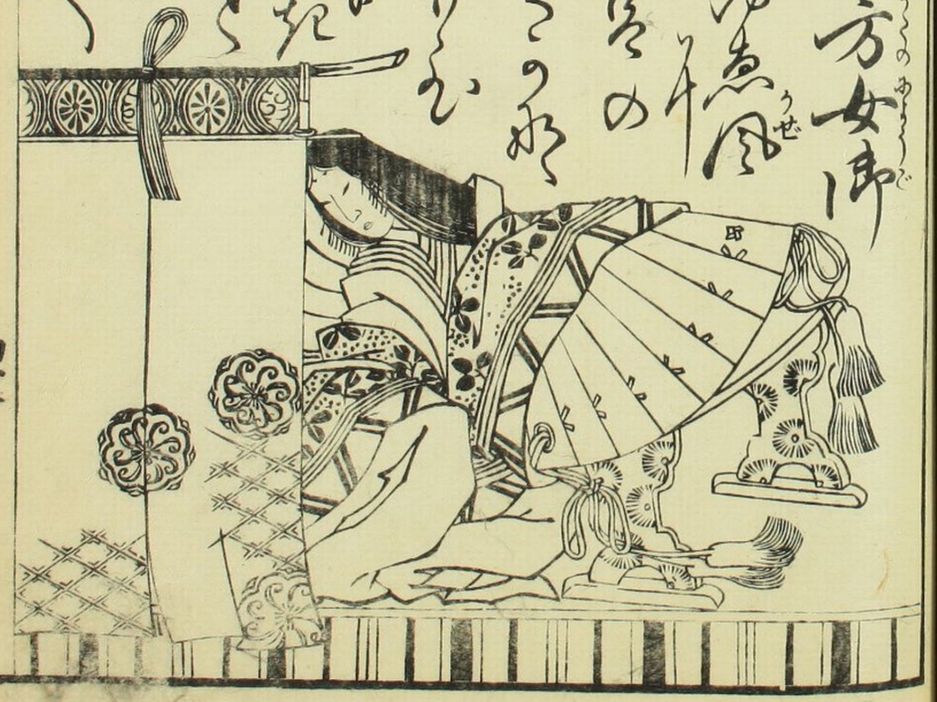
梅花女房

父は鬚黒母は玉蔓と竹川巻
より以中ねまろる氏系はこゝ
薫の来る時は僧る樂の竹
川うらびて通ぐりを
て薫の帰しをしみ
薫の許う○竹川おそ
生一筋は深き心の底を
あまやと泳おそる
く父は弁川うらび通ぐり来る
文さゝやかにいやぎ
一枝ばかり
思ひおきやさる
まらめの
つゝみおもはゆ
おりて
るまほとゝぎす

薫侍従

竹川み
れ
ふの
さ
お

父は鬚黒母は玉蔓と竹川巻
まろる氏系の女郎と生て姫宮
二柱をうめり四ツいまぐ家
に在一柱は妹の姫君と庭の
桜をかけおりて左右を
ち基ごもる時は負てる
ろる歌ども負ても猪
やりふ重おくるもあり
ち古のと思ひ桜
くる基ごもるうぐと
ひてをも花さまふ風ふん
を痛るまらせて一つ思ひ
ぐるかきふんの闇



負方女郎
桜
こ
猪ぐ
お
ぎ
も
る

玉葛は女房まで上手ぶり碁の強弱の時は左右を賭ぐるみの方人をつくりて賭ぐるころ桜などの物いさゝかを賭けよう数ふる物かれぞ強くて後ろ手に負けて悔ふもたらばぐいひもそ

宰相君

さくらばな
のつれなく
散ぬるは
もをまつよ
賭まけを
悔みもそ
なびく

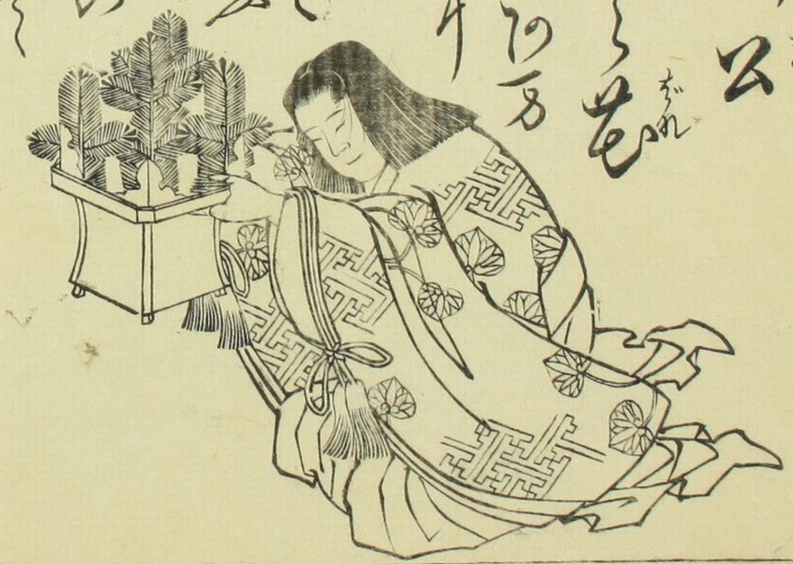
賭方の女房は姫君母玉葛のゆづりをうけて心得顔に笑ひ人々は上手を囲ひ時碁をうち強て勝ちを争ふ風情の数行世の常のごとくまけ方は物もとらぬ方は物を持ち寄りめしばいかゝなる事ぞと問ふ人のなきにつけて枝ぶりの美しき桜の下にて

枝ぶりの
美しき桜
ハ
世にまれ
なる
風みやび

方内侍督

大輔君

女童部名ごとに左右を
賀方の方人ども
かざさばう我物顔なるもの
つぐる花の風情自由なる物
仏物まうでを廿日ごとに
のつとめ教さとも思ひ
も大堂をおたてふ程の
袖に世よりる物ども
とをおしつゝ右の大
社風は教ぐらの
○おもてをおほひてかり社袖
もがめつゝをふまでそよめる
たり

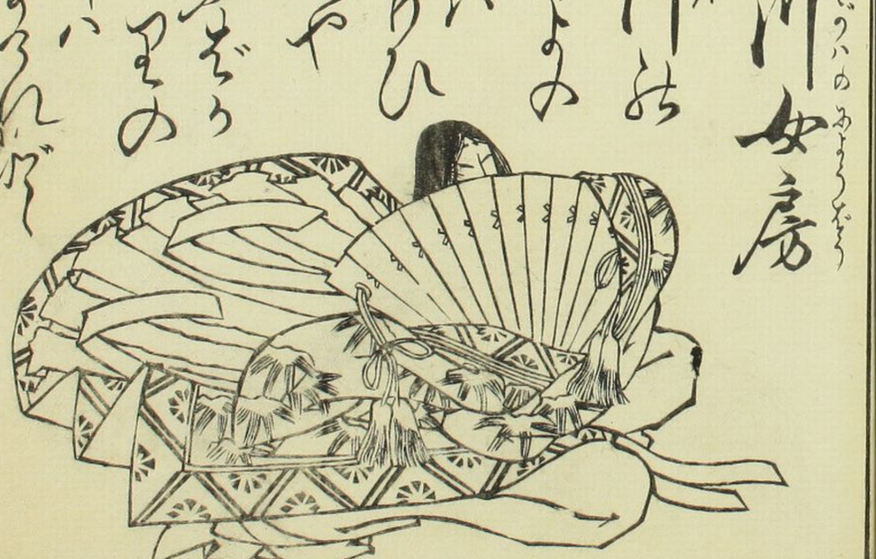


回所は女房ども
る上の件ある碁の
をかいとみて我ひそ
は貝ふるを悔しく思ひて
る立て助云ふ
物をふ〳〵〇いかゞ
ふ〳〵ぬ
ど
逃〳〵
をのふ
強きふ
ふを
うめて
くふ

源氏の住ひより母北の方
の女房の宮へいとなまめき
たる文書き給へり四位侍
従とかやう次ぃ丞進して有
本の書き様古代也無右大将
とみるはかゝる宇治をとぶら
ひ行通ひつゝ住みきこえ給
ひ儀して撫子の
の巻は宮こゝにいとゞろ
きを物おもふらめもゝく
ふでゝもゝ我淺か
とこゝへゝこゝやゝく給ふ訳
も無くそゝろめり

葦大将
山おろ
堪ぬ
葦の
霜
ようも
なやゝ
我
みぞれ

玉葛は女房なども葦の巻さ
る婦人などはしひて次第
わるくゝゝ乱れ世語り婚礼
乗川ゝゝして葦の院中
是の巻は源中将
ぐちて玉葛は方
とゝ川ゝゝ
我のゝ
撫
女
ゝ
ゝ
ゝ



乗川女房

桐壺帝の皇子源氏の弟君なり世
を遁て宇治の里に住み玉ひけり
宇治の宮とも云親王におはしまして
仏道にのみ心をよせおはしませバ
俗なから宮をも優婆塞を
形ハ俗なから心は出家に入給ひての
此親王に子二人おはしけるに後は北の方世
をはやう[illegible]給ひて仮の世共に
の子をよせ[illegible]鴨の
一種之[illegible]
雌雄[illegible]男女の[illegible]
[illegible]北方を我ハ
[illegible]世
[illegible]我一人[illegible]
[illegible]鴨の子[illegible]
[illegible]

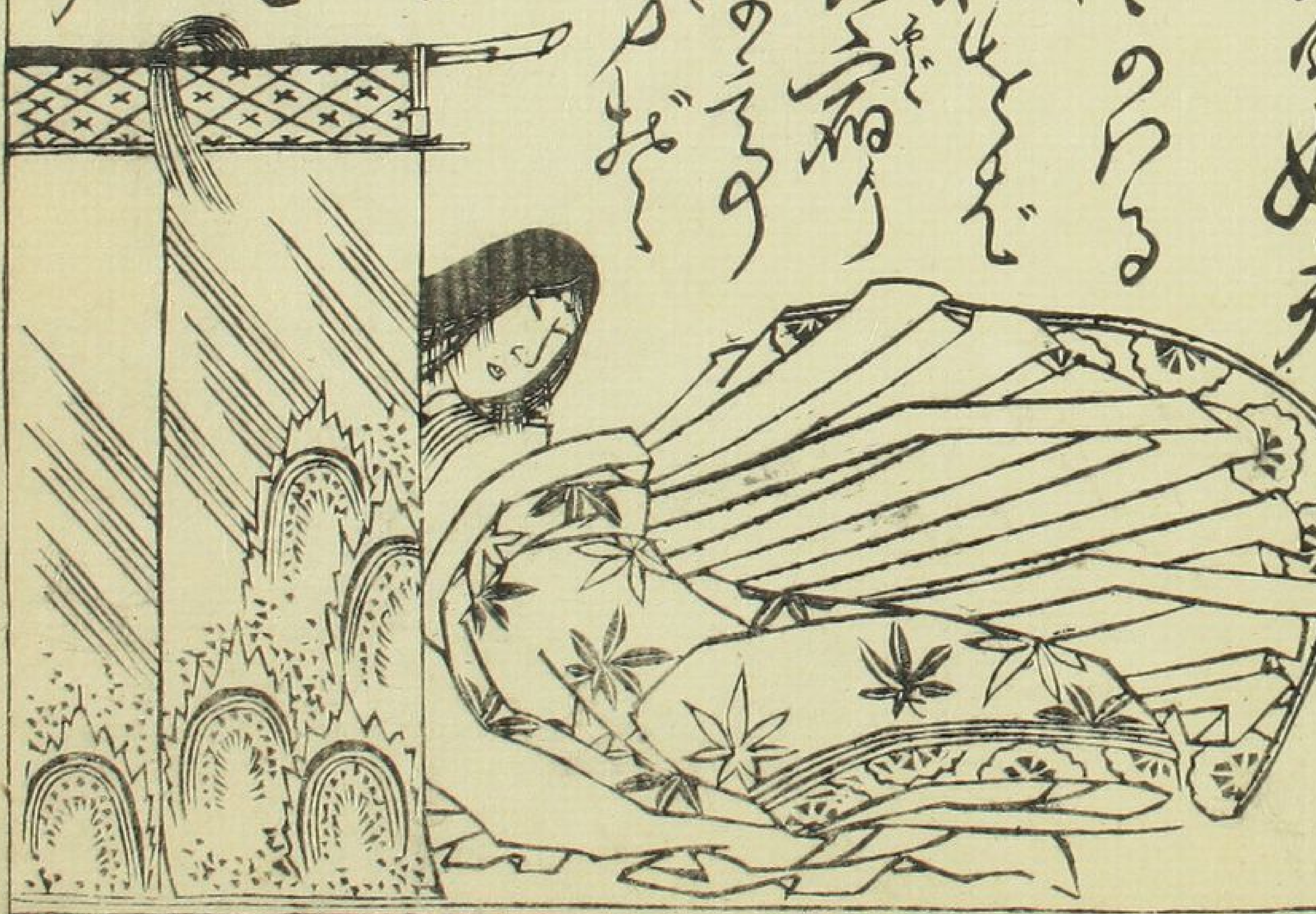
優婆塞宮

うち捨て
つがひ
さりにし
水鳥の
かりのこの世に
たちおくれけむ

優婆塞宮の御姫君也母君ハ
大臣の娘也総角巻にかくれ給ひぬ
[illegible]
薫は[illegible]○意ハ
[illegible]墨染ハ
[illegible]
[illegible]墨染の衣
[illegible]袖[illegible]宿り
[illegible]我身ぞ[illegible]
[illegible]置所
[illegible]墨染の衣
[illegible]

総角姫君

いろかはる
袖をバ
露の宿りにて
我身ぞ
さらに
おきどころなき



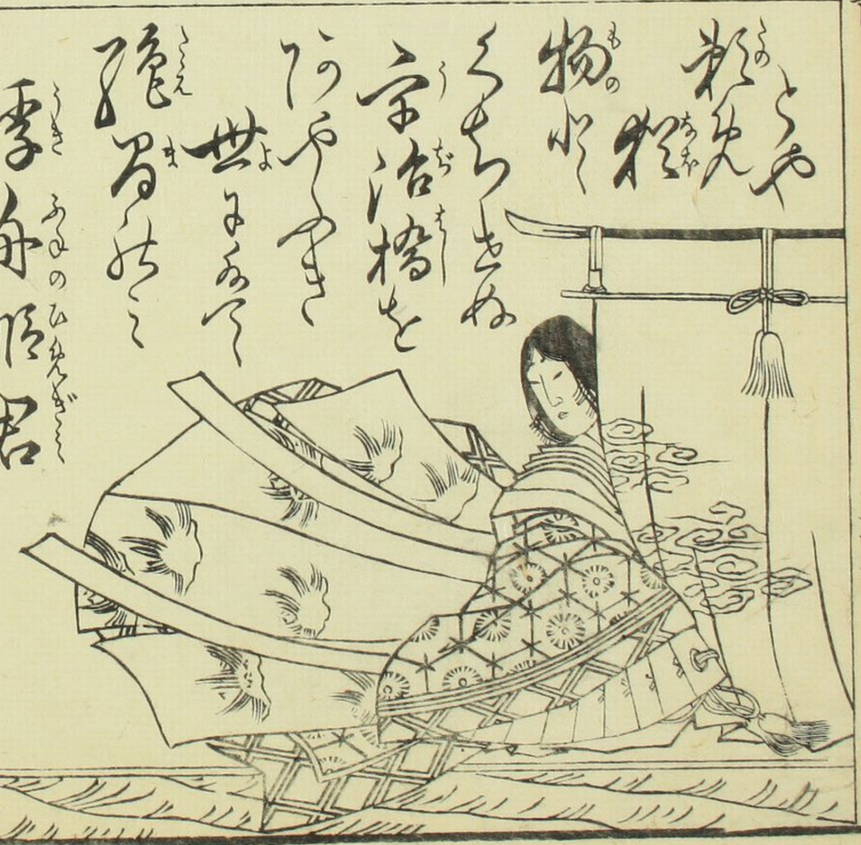
新帝は皇まるて御母せ
明石の中宮也孫宮巻々
彼しそ無勢なるまゝうみ
給へ宇治のもりなおもしほ
くる時優婆寒宮ようの山
陰まかくれ咲とく春にうめ
隔てそ含る花なれ共
と泳明うるまてほとゝ
川おちこち立隔ても
江ぶ共波ふ流ふ
咲るこゝろ今まて
うくひすなきそめぬ
川なみ

匂兵部卿宮

優婆塞宮の姫御総角姫
共に同胞の姉妹総角巻ゟ
旬宮に参内おもひ義巻ゟ
同宮は二条院ゟ迎ら
ゐんこゝろ生るみ共
は里にさみたる旬宮乃
ゐなくり○おぐるハ遣
雲井をいかゝおぼつかな
さをおくる時雨そと泳て
おくりつるほとゝぎすハ
時雨ふるころ山里ハ霧ふ
うて物思ふ夕ぐれ
ふもかなくらし

宇治中姫君

優婆塞宮は姫君と母八
中将共くらし女房四五
巻よ葦は思ひくに寝て
宇治は住なひ深母君子
白宮と密通て姫君
に分をおげくるを横川僧
都の妹は尼よ巻きてよ羽
巻よ尼と朱の宮は葦の
弾より〇〇も橋のおぎき契八
朽もぐとうやぶも方にさ
やぐめくを採おこせるてく
ん八通ひうみ妹君猿君物
当ごとやふくおもり悲ふ
よ君朽も契おこ君
ふと仰らるくなり



父八夕雲母八雲井屋ん
那八十月初日宇治山み
紅葉は言あーるる時
よまりて旅ん八ーま
は妻風宮は侍ま兄
来りをうぞおくの
のまぐ世おそうをう
かんぶひて姫君もみき
ぞさぐくやおひんん
吟のんを兄は妻秋
おさびしりて云るて
木本まる侍をそう
さん八大宮は猶もにむく
て云ふ

宰相中将

吟ぶやも
もひお
琴み
もあ
ふりお
ふやや
蛛ふ
さびみ

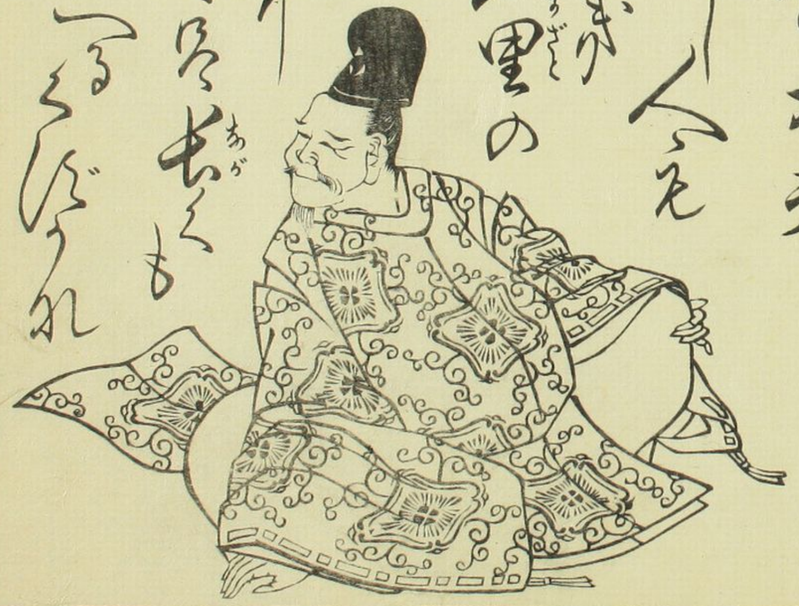
父は夕霧 母は藤内侍なり
この歌も上とおなじく名筆の
ほまれ人にしたひ行石中
宮は古代に似まく給へる
あるじこの山里はもと紫
式部の西ぎさまにうつし
を行ふにくも思ひを残され
を兄捨ていづくう行く
ゆくへぞ

右衛門督

いづよ
秋の
久
山里
の
ものみ
うきも
を

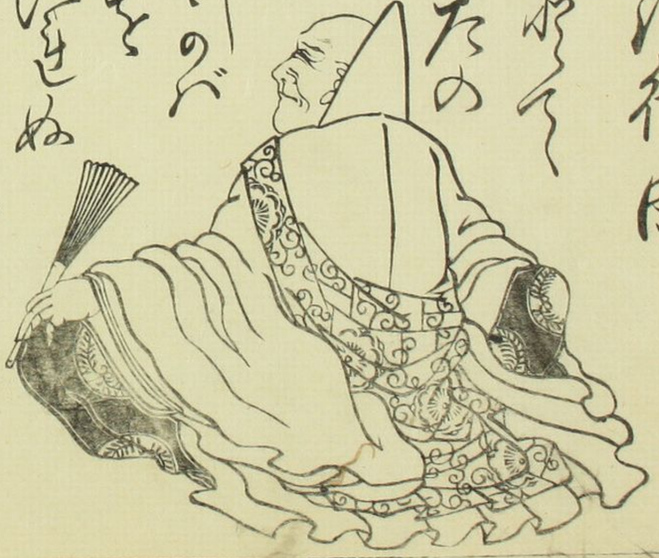
昭石中宮古まで此人を老
人まで昔の優婆塞宮を
山里ふるくこと思ひ出
時は中宮の御ゆかりて
行ようふるまひ
を愛に住てかなしき優
婆塞宮も今はおもき物を
石垣よ葛はふもそれ
物思ふ人のうれとを思ひ
よるこころぞくに葛はもれ
ぬせと

宮大夫



宮の
人
あ
山里の
岩垣

優婆塞が宮に住む律師
招婦羅巻は阿闍梨持経巻
を律師と称する也又いくそ
く住宅かくしのひて後は居
姫君姫君其外のかく事始也
薪つくくしを結てまゐる
きくるゝくんハ父宮法生世ま
数年年来一ありし例の小ば
いつりのおるを
うつて生る薪をとく妻
を積る薪を掲を巻う



宇治律師

又ハ左中弁母ハ拘木右衛門
督の乳母と宇治宮に仕へて
紹角姫君かくれのひて後ハ
薪巻ハ尼ハ宋ぬ四巻ハ則
姫君のくせまるをあげきて
詠るとくハ仏事ハつきても
まづ後のこゝろにて作くあり
そかゝるを世後の作み
分をあげくふ姫君みも
おくれ先立べくとも

雑尼

姫宮浩宮に仕へ給ふ頃二条院
侍ける女房に申姫君
旬宮にゐてまゐられて二条院も
物うつくしませ給ふ
長く生ほしたてまつれかしの
ほど
姉君
ゆきもやらぬ空の
なごりかな
浩宮
雪ふかき
庭の面を
ふみわけて
君にぞまづは
こととはまほしき

二条院大輔君

同所の女房ども同時に
うへなどもおはしまして
紙絵姫君の
ほめさせ給ふ
浩宮
ゆきふかき
山のかけはし
君ならで
たれかわたらん
ふみもみず
ハ文とぞ云るおめど

行心女房

朱雀院のうつほ吉母ノ兼春殿
女ノ松風ノ古ノ姉ノ標柱卷
ニ朱雀院ノ三梅枝ノ巻ノ元服ノ
茉卷ニ侍従ノ巻ノ少将ノ
此事ノ巻ノ女ノ二宮ノ母花壺
女房ノ巻ノ夕霧ノ後ノ二宮ノ侍ノ
ノ巻ノ一まきノ巻ノ北方ノ
ノ人ノ巻ノ夢ノ浮橋ノ
ノ巻ノ母女ノ松ノ二宮ノ
ノ巻ノ夕霧ノ後ノ二宮ノ
ノ巻ノ一まきノ巻ノ
ノ巻ノ夢ノ浮橋ノ

新帝

雲かくれにし夜半の月かな

菊あはせ

秋ごとに

あまたみつれど

三条宮の女房ノ薫の思ひ
ひくことはなき薫の君ノ浮く別
世ノ巻ノ一まきノ巻ノ
ノ巻ノ一まきノ巻ノ
ノ巻ノ一まきノ巻ノ
ノ巻ノ一まきノ巻ノ
ノ巻ノ一まきノ巻ノ
ノ巻ノ一まきノ巻ノ

桜宮

秋の末の女三宮にんを奉
人こと出るを聞き給ふ
べくもあらぬ御ありさまを
悲しの宮と後さるべき前の世
垂るべく藤の宮ありしほは
はかなく詠るしかの世の常の
哀れ更なり思ひ出でしまで
かづきの御声に撰ませて
家上達部殿上人ども果
敷者ども次々をうけ相
ふさがりひかれ給ふ様もよせ
てぞ心ぐるしき始を含めり

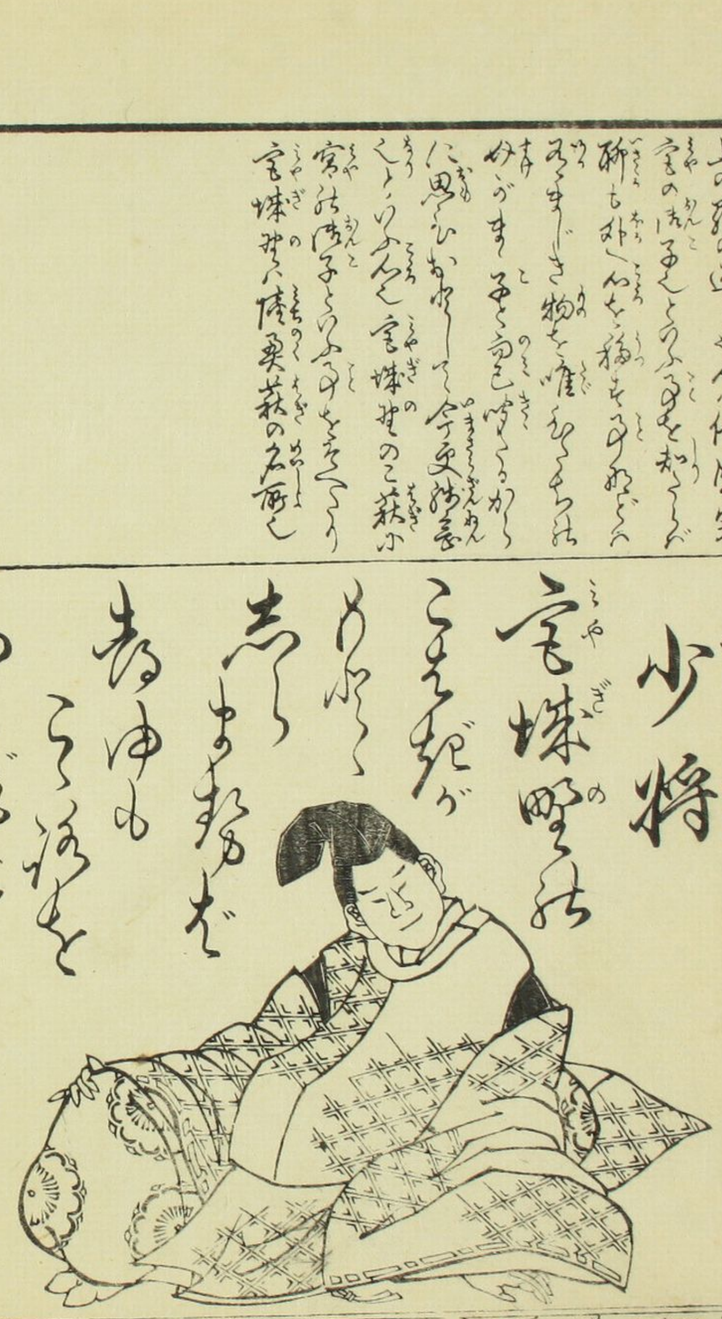
始中将君こゝにて優婆塞宮を
仕へ澪標姫君を産て後
光源氏姫君をめぐりて
人々思ひつゞけめぐりの
光源氏が愛の始末
うつゝなきほどなれば
くにの約束
ハ通人も世あるをいふ
ほんにぎこゝろを
しゝて寝る下葉
よもうき恋ゆへ領
ぞ今約束

常陸北方

末摘花

上の巻の通り六人優婆塞寒
室のまにまとうふるまをおくる
猶も外へんを捨をそめんく
みるまゝき物を唯もてもち
なかゞまゝまを急ぐかく
に思ひおもひて今更物言
くとのみんと宰相の君萩か
宮はぎのうへをそゝくり
宰相の君八侍奥萩の名所と

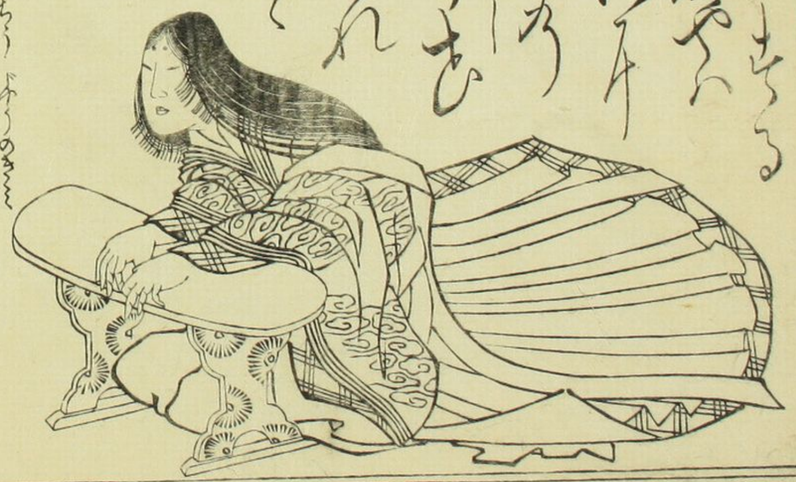
少将



四石中宮のまゐ扱ありて二品宮
の女房まゐ蓋の思ひ人也
ハ浮舟の姫君をうばく
浅蓮は歎ばしきとやう
らひくるゝ人世の常を知
八人ばかりおもひ出ぬ歎
そのゝち猶置てハいかゞ
まふべきにやあでやかの
人数ならぬ身ハ
かくて浮ぬるに物ひて
ながらへ

宰相君

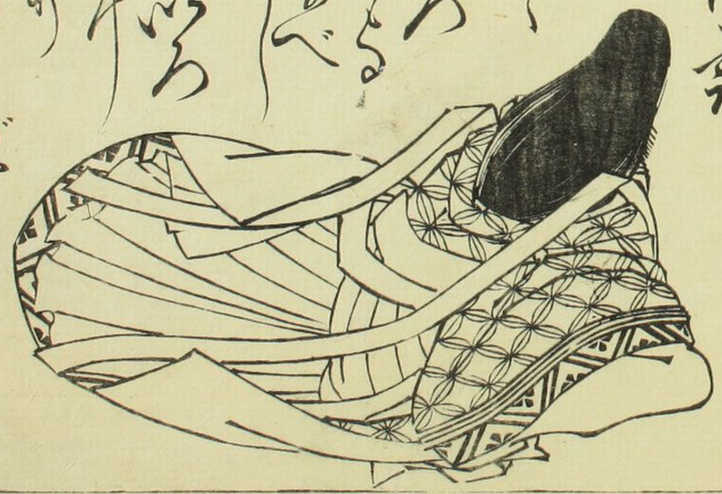
国宝仕女房ども物語しそゝる所〳〵薫たくゆり満てたりふさ〳〵み
○女一宮もゆるし給べくもあらず
じ〳〵の宮のたゞ名をのみにくみ給へらず
思へ〳〵ば女ばらばかる物はやうに名はとゞめてこそやむ
一通りの雲まを乱そめのうへ〳〵ぐ物はうたてのふみを女一宮もゆるし給べくもあらず



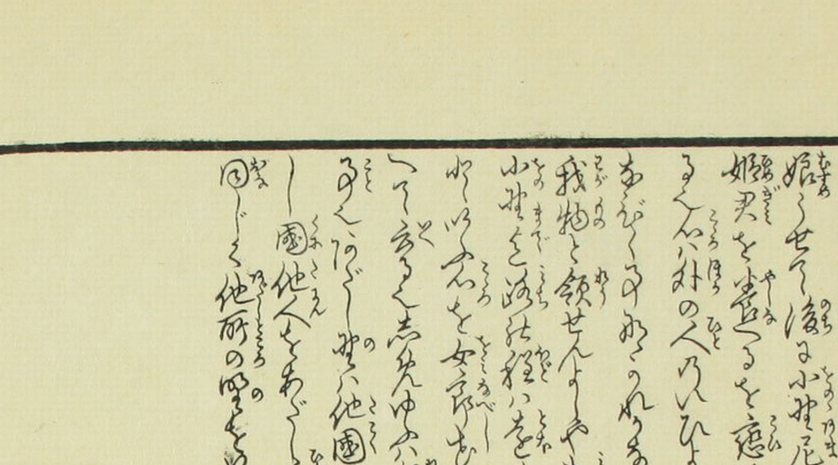
一品宮中将君

おぼし言の女房ども上とお法師ばらよろづのあはれをつくさやうに泣まどふ〳〵ぐる程さまかはりたる色ふかうそめわたせる物ゝうつりのこる女ばら中に着ふして自分を残すとも見ず薫の御なき

雑蔵人弁少将



小野尼の娘は聲こそ好き
姫こせ〳〵泣は小野尼泣母
姫君を惜るを恵てよめる
るく〳〵ゐのくりいひもるも
あぢきなや我物と領せんよりや
小野までゆけ程ゐをそく
かくれゐを女郎もべし
〳〵そうく志賀ゆゐ領せる
るくつぐ〳〵の世ゐ他国をうぐ
〳〵風他人をあぐ〳〵云に
国ぐ〳〵他所の里をいふ



中将

なぐ
風な
女房
我〳〵
ゆき
路な

横川僧都の妹こは尼そう深
草姫君を告取てう姫は
都うに聲は中ねよ通ちん
や尼のこゝろ思ひて種〳〵進
ものを深き受へざるを
わびて別上の歌は通ふ
くゐ君〳〵紀のはいる世ろ
中は厭〳〵さにこれ世をそ
もきたるゐは庵ある物を
は姫君苦物てう尼はげ
あき物つひをてゐ
学〳〵仏をゐを庵室
は庵ゐ女郎もべ
るくる君〳〵て〳〵

小野尼

をの
う君
ぐ〳〵
迷ぬ
女房
う君
おゐ
学ま

天保十年己亥十二月發行

松軒田靖書

橋齋清福画

玉山書堂梓

金花堂藏板目録

源氏怒草 五冊 成島公亭

此書ハ源氏物語一部の大意を神學のかた
ゟ詠やまとうたの事ゟ記しるしたる
ものにて源氏を學ぶ人の必ず
まづよこ味ひよむべき書なり

萬葉楢落葉 五冊 正木千幹大人輯

此書ハおよそ物かんとする神學ゟ
萬葉集の中のおもろくめづらしき詞を撰
ひ出して其巻〻
一の巻 天象の部 二の巻 地儀の部
三の巻 神祇 釋教 人倫 画郷 居処の部
四の巻 服飾 器財の部 五の巻 鳥獣魚虫草木の部
座右かざりそこの學の考へ證ニ備へ
ゟ考へ究むべき書なり

千鳥之跡 一冊 中臣親滿大人著

此書ハ源草櫻紙組冊ホれらりあさめ
ゟと古人の書蹟或ひハ古書ホによりて
考へ究めまとめる書なり

明季遺聞 四冊 清鄒錫山先生著

此書ハ清ノ鄒錫山ノ手輯ニシテ明末李自成
ノ乱ヲ倡へシ本末ヨリ清ノ關廣ヲ平定ス
事ニイタル國性爺ノ事實等ヨノ書ニ詳
ナリ

歷代帝王承統譜 折本 一冊 紀藩春川先生校閲

此書ハ唐虞以来清ノ道光帝ニイタルマデ
ス〻テ漢土歷代承統ノ主ヲ系譜ニ作リテ
歷史ヲヨムモノニ便リス

草聖彙辨 八冊 清朱珪陵先生纂辨 皇國永根文峯先生校字

漢土ニテ歷代ノ草法ヲ集メタル書數多アルカ中ニ
此編ノ精善ナルニ如ハナシ我朝兼明親王ノ書
ヲモ此編ニナリメ出セリ始メニ一畫ヨリ三十畫ニ
至ルマデノ撿字アリ此ニヨリテ字ヲ索ムベシ第八
巻ニ草法母觀ヲ附シタリ草書ヲ學ビ玉フ君
子珍ヒズハアルベカラザル書ナリ

日本橋南通四町目 須原屋佐助

古今選　三冊　本居先生輯　村田遊樹大人校

此書ハ本居大人ノ撰ミ給ヒシ人丸ヨリ定家ニ至ル二十九首ノ和歌ヲ一代集ノ外ニ抜キ出シ其ノ歌ノ意ヲ釋キ給ヒシ物ニテ古今集ノ序ニ倣ヒテ撰ビ給ヘルモノニテ姿調ノ手本トモスベキ書ナリ

類題和歌補闕　六冊　加藤古風大人撰

此書ハ世ニ行ハルル歌集ノ類題和歌集ノ類ノ漏レタルヲ拾ヒ集メテ一代ノ歌ヲ二十九首ヲ限リ部類ヲ立テ廣ク採集メ四聲ノ濁字ヲ考ヘ訂サレバ初心ノ人ニモ便リ多カルベキ書ナリ

唐物語　一冊　西行上人作　清水濱臣大人標注

此書ハ昔シ西行上人ノ支那ニ渡リ給ヒシ事ドモヲ記シ給ヒシヲ濱臣大人ノ標注ヲ加ヘラレシ物ナリ

草書前赤壁賦　一冊　天民先生書

此書ハ前赤壁賦ヲ詩佛先生ノ書レタルナリ筆法一家ノ風ニシテ激セズ勵セズ手本トスベキ書ナリ

小學題辭　一冊　龍澤先生書

此書ハ宋ノ朱文公ノ小學題辭ヲ龍澤先生ノ書レタルナリ筆力怒張唐人ノ風アリ

瀧本氣霽帖　一冊　猩々翁真蹟

此書ハ朗詠集ノ詩ニ和歌ヲ加ヘ出シ猩々翁ノ書ケルヲ寫シタルナリ

貫之朝臣書

堤中納言家集

此ノ書ハ堤中納言兼輔ノ家集ニテ紀貫之ノ書ケルヲ模寫シタルナリ

假字考　二冊　岡田眞澄大人著　鴨齋先生漢文序　濱臣大人かお序

此書ハ假字ハ何ノ字ヨリ出デ來レルカヲ考ヘ證ヲ引キ濁ノ文字ヲ考ヘタルモノニテ古今集ノ文字ヲ考ヘ出シタルモノナリ

新朗詠集　一冊　真海柏木先生輯　素堂山本先生校

此書ハ詩ハ上文武帝ヨリ下儒佛ノ比ニ至ルマデノ人物ト撰ビ出セル和歌ハ其ノ世ノ歌風ヲ考ヘテ撰ビ出シ給ヒシ物ニテ古今集ノ假名序ニ倣ヒ作者ノ時世ヲ記シ給ヒシ物ニテ詩歌共ニ秀逸ヲ撰ビ集メ一部二卷ニ分チ卷首ニ時ノ題ヲ大書セリ

歌仙繪抄　一冊　藤原正臣先生著　喜多武清先生摸畫

此書ハ能因ノ家隆ノ定家ノ公任ノ俊成ノ歌仙ノ圖ヲ寫シ出シ武清先生ノ筆ヲ出サレシ美本ナリ

草書千字文　一冊　屋代先生書

此書ハ輪池屋代先生ノ筆法ヲ見ルベキ刻本ナリ

玄對先生画譜　三冊　玄對翁筆

此書ハ人物花鳥ノ類ヲ玄對先生ノ画ヲ習フ人ノ手本ニトカヽレタルナリソノ奇絶ナル一本書ヲ開キテ見玉フベシ

幼稚画手本　一冊　柳烟堂主人筆

此書ハ山水人物花鳥ノ画ヲ手ニ入ヤスキヨウニカキ給ヒシ物ニテ初學ノ人ニハ最ヨキ手本ナリ

西音發微　二冊　柳圃先生遺教　大槻玄幹先生著

此書ハ西洋書飜譯ノ時西洋語ニアタル和音唐音ヲ撰ビ對註ノ仕樣ヲ詳ニサトシ西洋字原考ヲ附シタリ

言元採　一冊　大石千引先生著

この書い祠の元の説を評ふ考定めまたる説言い清音ゆえゆえ用ふふ濁音あるゆ祠の言出しを濁る例い一切ゆえまた字音の例ある例お混ぜる祠ふぐと評ふ次次ゆ引ハみ十音多ゆみて採出ふ便あるーむ

假字便覽　一冊　大野廣城先生輯

さまざま對歌音仮字音濁活假字仮名を混ふ雅活をめとより字音俗活まぜれ假名と評ふてひの音仮いいおおまひへの音仮いこれ名ふ活ぶ歌をうう安たゆうふけとさとする書をう

古今和歌集新校正　二冊　賀茂翁考正　鈴屋翁再訂

これい古今集の善本より

後撰和歌集　一冊

出ふ流布する後撰集の別本大冊のを

元和帝御撰

集外歌仙　一冊　一名　近代歌仙

これいかけまくもかしこき後水尾の上皇の撰ばせ給ひて　東福門院の御歌月次もあくまし三十六歌仙より純ふ仏者の姓名を附ふより

正誤假字遣　一冊　賀茂翁鳶縣主輯

さまざま古書を考え引き証を挙げて何の假字をいろはふーる引出ふ仮名ふーむ

源氏百人一首　一冊　黒澤翁満大人著

さまざまの写本の小倉式紙ふるひ源氏物語中より百人を撰びおのおのその名の一首ずつを出して児女子のいろいろ安女ふう小冊数を加へらるさう安女ふいたぶるのいろいろ安女ふるまぶまぢまのまにより源氏の大意をさとりやすべーー

掌中古刀銘鑒　一冊　臣檜園輯

此書ハ先ニ銘盡數多アリトイヘ皆其ト事替リ當　同前專両作一傳ノ次第珍敷作人其外古野年号打作人又文中心錺廣狹帽子ノ箇條刀者師自造リノ様子梵字并紗物ノ次第鑒定會ノ入札ノ答ヘヨリ致シ鍛冶ノ官名作入位列鍛冶ノ系圖并名字等ニ至ルマデ委シク辨ジ難キハ圖ヲ出シ疑敷事ハ載ズ奇大ノ珍書ナリ

甲冑圖式　一冊　栗原先生著

此書ハ武林法量二編ニテ甲冑ノ圖ヲツマビラカニス

武器袖鏡　一冊　同　著

此書ハアラユル武器ヲ圖式ニアラハシテ且附言ニ兵士ノ事ニ付精シキ考ヘアリ

武器袖鏡後編　一冊　同　著

此書ハ甲半首喉輪ヨリ馬具旗指物

單騎要略　五冊　村井昌弘先生編輯

此書ハ甲冑ノ着用故實禪襯衣等ノ付ヤウ頭盛ノ緒ノシメヤウ背旗ノサシヤウ等マデオノー圖ヲ設ケテ詳ニサトシ手ニ携る処ノ鎗刀器械ニ至ルマデ其故實ヲ明ラカニシ一騎前ノ要領ヲ盡セリ武家カハサラナリ有職ノ学シ玉フ人ハ必坐右ニ置ベキ書ナリ村井先生ハ神武迪精武学先入等ノ作者ニシテ其名高シ

足利家武鑑　一冊　間鐘先生校

このまハ足利將軍家の武鑑おーそれの沿革ふ役柄おによりて委しく考へ記ふ者の略おかうの多ーー

弓箭圖式　一冊　栗原先生著

此書ハ先生著ハス処ノ武林法量中弓箭ノ一節タリ武家カカナラズ見玉フベキ書ナリ

うた次やう色目　小本緑色摺　一冊

詠草消息等に用ゆる紙やう色々事により宜しき紙合わせより消息のひれさく文紙のちらしかたを示せる書なり

縣居雑録補抄　一冊　賀茂真淵大人著　長野美波留大人標註

この書ハ故翁の心づくの書ともに聞えたる人ぶ志るしおかれたることどもあつめて五十条ふりわけのちの人のためにとて老人の志るしたる物なり古人のすがたをいふ事をあらはせるにいたりてハいにしへの代々の物語ともいふべき書なり

裁縫早手引　横本　一冊　女中必用

この書ハうぶぎの裁方男女守袖陰陽のつけ紐の法一ツ身三ツ身四ツ身もの袴上下袴

等ニ至リスベテ武器ノ圖式ナリ

武器袖鏡三編　一冊　同著

此書ハ現在する古甲冑五十二種ノ威色を彩色圖ニアラハシ甲冑製作ノ便トナラシム

武家用文章　一冊

此書ハ武家方の文章公用向の切紙より年始の書状結納等代々の目録よりそのほかまで巨細に志るし分てかくべきの要文をあつめたる書なり

廣益諸家人名録　一冊　詩　五山　佛　西先生序

此書ハ現存の儒家書画家国学家有識家より篆刻家等のたぐひまで姓氏別号住所等国名をあらはし遠近の人の便とす

臨時客應接　一冊　未學堂先生秘授

うまのりうちあひ野袴合羽などの類をはじめ夜具又ハうちかけ幕そのほか幕の方にいたるまで縮緬唐桟絹子毛織等のたぐひまで裁方縫方を細かに志るしたる書なり

繭養法秘傳抄　一冊

此書ハ山まゆ種を求めて飼育の法より織物にいたるまでの秘傳をくはしく図にあらはして家宝の書なり

皇和魚譜　二巻　丹洲栗本先生纂

此書巻一二八河魚類凡五十一種ノ圖説ヲアゲ巻二ニハ河海通在ノ魚類一十三種ノ圖説ヲアゲタリ海魚ノ類ハ追刻ニ出ス魚類ノ性味良毒ノ辨ジカタク混ジヤスキモノ此書ヲ見テ分明ナルベシ

穂立手引草　一冊　酔吟居主人編著

世の書ハ先儒禅家の説をもつはらとして国学の書はいまだ少なし此書ハ人の心得べき万事の事を志るし...

富士根元記　一冊　鈴木頂行先生校

此の書ハ詠歌の法を孫歴せし浅間の神の御本地よりはじめ富士の山の縁起等をあつめて風流の士の一覧に備ふ

金生樹譜　三冊　長生舎主人編

古今和歌六帖標注　契沖阿闍梨　平田豆流校定　加茂真淵翁校本　山本明清校注

松葉蘭譜　一冊

古今名物類聚　全十八冊　不昧公著

古今歌書　二冊　羽佐間先生口訣

老婆心書　二冊

爲已執記　一冊　羽佐間芝瓢先生著

日光山誌　五冊　植田孟縉編

更科日記　二冊

須磨のかいさし　一冊　中臣親滋大人遺文

張氏醫通　廿七冊　明張路玉著編

言志録　一冊　佐藤一齋先生著

江戸町鑑　二冊

江戸町つくし　一冊

袖珍名鑑　一枚

勸善忠義傳　二冊

畫本勳功草前集　五冊　山崎知庫大人輯　喜多武清先生畫

目録四

小説土平傳　一冊

俳諧人名録　二冊　東都惟草莽先生輯

此書い當世の俳諧家の人名をいろは分にて
載その下ふまた發句を出せり

俳諧職業盡　二冊　茶靜大人撰
梅令大人校

此書い近代若干俳者の職業の數々を
あまねくもれなくつづらる職業の數を
めて一冊にあつめ俳句を加へさそ面白く
天晴ぺ未曾有現在ふみろまぐれ人のの
撰びてんだ有ふるものそを合せよう呂俳
諧ふ遊ぶ人のこのむぞこの書をよくみつで
益ふもやうあるべきふふとなり且勾葉の
くさ〳〵なるべき書なり

俳諧年表録　一冊　尺尺齋豊山翁著

此書い徳蔓草の表の如くまでめつまくの名家の
生没歿年雅俳をあきまくしるす書なり

觀世繪部太夫校正
諷本百二十番　十珍本薄用　全二十二冊

繪本三國妖婦傳　上編五冊　中編五冊　下編五冊　合十五冊

此書い高蘭心先生の校本ふて世上にみる所の
玉藻前の濃本なり但し深長大意ふれ
書なり

魚獵手引種　一冊

五百崎虫の評判　一冊

俳諧發句題叢　四冊　椿丘太笏翁輯

此書い拙句類抄ふあるひて近代の俳家
二十七十二人の發句をあつむ其ふ百ふ五句にて
を各家の名家をあげたり

古今千五百題發句集　二冊　墨瀬曽見翁校輯

此書い古今名人の發句を類題ふてちぢめて俳
諧ふ志ふ人のこのふうぶんとして古人の房ふ古の
字を附く今人となりて

芭蕉發句小鏡　一冊　雪中庵蓼太翁述
門人　三餘著

同外　近刻

早引三體節用集大成　全一冊

大寶百人一首紅葉錦　全

桃花百人一首　全

錦百人一首　書後山流彩色入　全

瀧本六歌帖　全

同三十六歌仙　全

千蔭先生書

山居帖　全一冊

同新百人一首　全

萬葉新採百首　全

大歌所御歌　全

此書い發句案ト方の發句をあつめるようすべて俳諧仕立のふふるとを教へるまなり

梅室家集　三冊　梅室先生自撰の集なり

梅室大人附句抜萃　二冊　勢南菊叟翁編輯あり

今人明題集　二冊　双雀庵氷壺翁輯

此書い天保の初比より世ふ流行る俳家の
秀句を類題ふしてその句案の一助とするまも

末葉俳諧集　五冊　双雀庵末葉翁の家集也

俳諧發句朗詠集　初編一冊　一名口調亀鑑

此書い宗匠家の撰び抜のく同じ
百句ふ及ばざるふこそ
みるものくの眼力ある
ようふ成ぬさんかうふもん法家の評ある發句を
なつめてるなり

俳諧合鏡　懐中本　一冊　拙堂芦丸翁撰

同古今かな序　全
同往かひ振　全
真艸千字文　全
同用筆類　大中小色々
同御好短冊式紙　色々
百瀬高翁傳　全一冊
同みこと傳　全
艸書千字文　天民先生書　全
獲山庭訓傳　全
万寶おび掛　全
沖の白波高翁傳　かな附　全
實語教童子教　全

抱一先生画譜　一冊　彩色入善本
近代名家画帖　二帖
名家画譜　一冊
彫物画手本　二冊
繪本百物語　全五冊
繪本大和錦　近代名人　全三冊
古今名馬圖彙　全三冊
繪本金剛傳　全二冊
繪本武者揃　全二冊
繪本勇士鑑　全二冊

世まいにち〳〵今の名ある人の句を追々に加筆して當世撰歌などの便りとする書なり